銀河戦国群雄伝 7

ライ

真鍋譲治

Dengeki Comics EX

DE-5-1

発行 メディアワークス

発売 主婦の友社

DC EX

銀河戦国群雄伝ライ 7

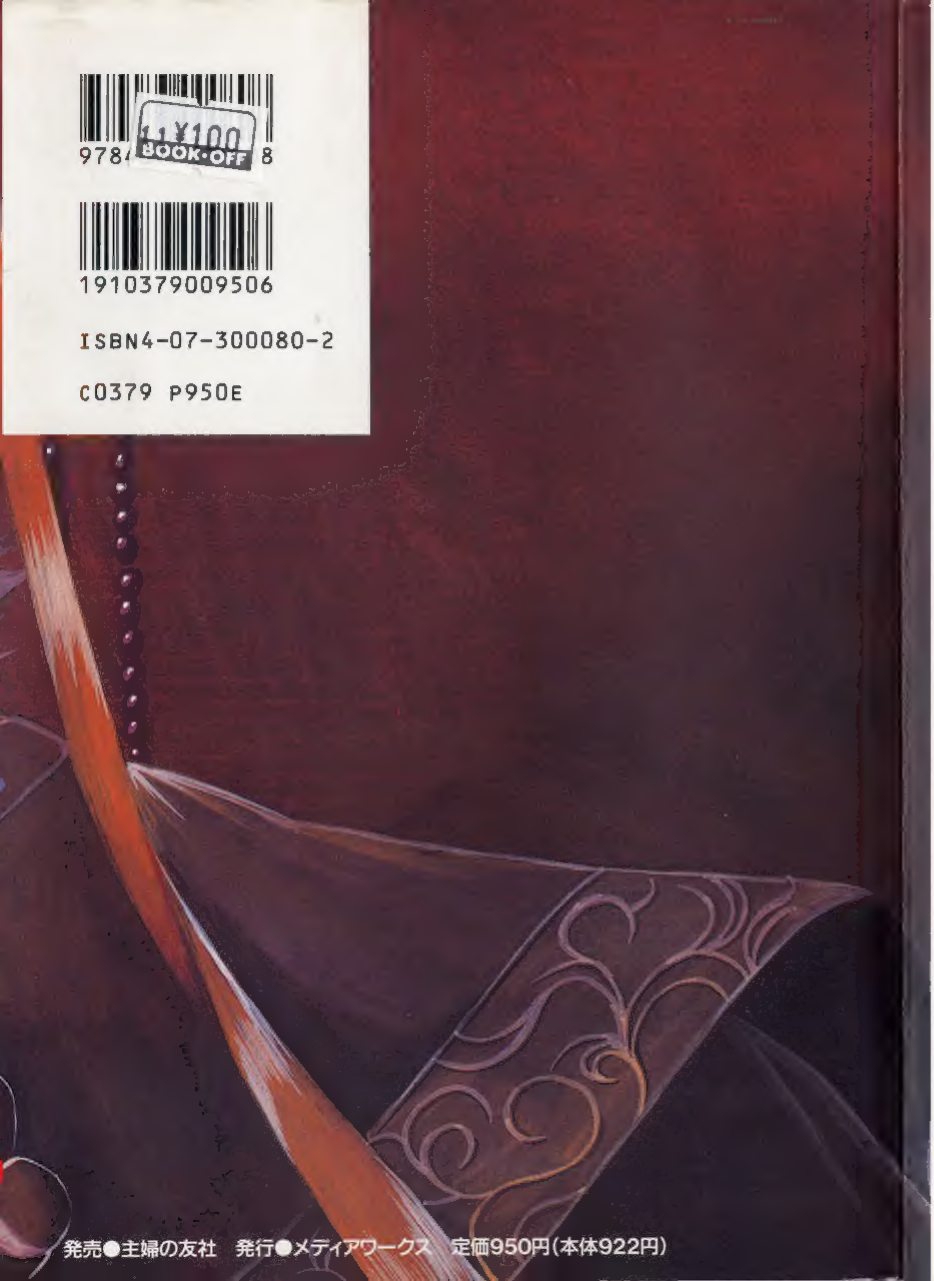
真鍋譲治

9784 ¥100 BOOK・OFF 8

1910379009506

ISBN4-07-300080-2

C0379 P950E



発売●主婦の友社　発行●メディアワークス　定価950円(本体922円)

DENGEKI COMICS EX

フォーチュン・クエスト① 迎 夏生 深沢美潮

ダンジョン・マスター 栗橋伸祐

エンジェルアーム① 衣谷 遊

電撃摩陀羅海賊本① 田島昭宇 with MADARA PROJECT

銀河戦国群雄伝ライ⑦ 真鍋譲治

DENGEKI COMICS

ローンナイト2①② 吉富昭仁

ヤンキーTURBO—最後の爆走—山本よしふみ

月刊電撃コミック GAO

伝説をぬりかえるアクティブヒーローコミック

毎月27日発売

電撃王

読めばシ・ビ・レ・ル パソコンゲーム情報誌

毎月8日発売

電撃スーパーファミコン

100万ボルトのスーパーゲームマガジン

毎月第2、第4金曜発売

電撃PCエンジン

エンジン全開のアクティブゲームマガジン

毎月30日発売

電撃メガドライブ

シビれる高機能ゲームマガジン

奇数月8日発売

銀河戦国群雄伝ライ

7

真鍋譲治

DE-5-1
発行
メディアワークス
発売
主婦の友社

RAI

BY JOJI MANABE

7

●ARTIST
JOJI MANABE
●EDITOR
NAOAKI ARAKAWA
JUN NIKAIDO
ANRI KOMATSU
●BOOK DESIGN
TETSUYA ASAKURA
●SPECIAL THANKS TO
MASAHIKO YAMASHITA
HIROYUKI HIRAYAMA
HIDEMASA IDEMITSU
YOSHIKI MORISHITA
TOSHIMICHI OKITA

戦国の銀河を生き抜く群雄たち

【竜我雷】りゅうがらい

本編の主人公。その度胸と悪運の強さを狼刃に買われて一兵卒より師団長に抜擢され、五丈軍先鋒として南天に雪崩込む。新任師団長として南天軍の前線を突破するや、大暴れして要衝座王都に一番乗りを果たし、その勇名は敵味方に響き渡る。退却戦において正宗に一騎討ちを挑むが破れ、瀕死の重傷を負うが、その傷が癒えぬうちに、元宮廷勢力による反乱の鎮圧に出動し、たちまちのうちに制圧する。その功により騎都尉に昇進、だがその運気がただならぬと感じた玄偉陣営によって都から遠ざけられ、国境の要衝南京楼に太守として赴任する。初めて地盤を得た雷は、その地で牙を磨くのであった。

【大覚屋師真】だいがくやしいん

南京楼の豪商大覚屋の放蕩息子。普段は酒色に溺れ、甚だ評判が悪い。だがその知謀たるや史書、経書から兵法、天文、医学に精通した天才的な戦略家である。自分自信もその知謀で天下を動かすことを夢み、時を待つ。プライドがとても高く、自分以下の者に対して容赦が無い。それ故その隠れた才能を知る諸候からの度重なる招きを全て固辞している。やがてその南京楼に雷が赴任してくる。

【紫紋】しもん

敗将阿曹主禅の一人娘。皇室の血を引く唯一人の王女故に悲しい運命にもて遊ばれる悲劇の娘である。実の父阿曹主禅を雷に殺され、五丈に身柄を引き取られ、恩賞として仇でもある雷の元に預けられる。だが雷とはそれを乗り越え深い愛情を寄せ合う。その後も雷を陰に日向に支えていく気丈な娘である。

【雲海入道】うんかいにゅうどう

雷の長年の戦友。かつては高僧に仕える身分でもあったが大酒のみが仇で宗門を追われた破戒坊主。だが雷にとっては最も頼りになる豪傑である。終始、雷と行動を共にし、時に暴走する雷を諫める役に回ることもある。雷の密命を受け、暴政下の武王郡に残り、麗羅の保護を頼まれる。

【太助】たすけ

雷と同郷であり、幼い頃から雷を兄として慕う。その小さな体に似合わず、雲海と共に各戦場を転戦、修羅場をくぐり抜けた強者でも

ある。終始、雲海と共に雷の側にあり、雷も彼らといる時だけは昔の悪がき時代に戻った安らぎを得られる。

「子龍」もうかく

元4077師団の副団長。冷静で勇猛な剛将であり、経験不足の雷を適切に補佐する。歴戦の強者であり、暗病風に吹かれた上官を殺すなど厳しい面も持つ。雷に将としての器があるのを見て自分の主として雷を認め、その精業に重きをなす。

「三楽斎」さんらくさい

南京楼軍の武将。主人運が無く、自分の出世のために各赴任地を転々とする。その処世術のために孟閣らにはよく思われていないが、彼自身極めて有能な官僚であり、弁舌の才をもって雷を補佐し、外交、内政面において活躍する。

「鐘士元」しょうしげん

南京楼軍の武将。雷の師団長時代以来の宿将。勇猛であり、常に先手を受け持ったが、師真のような新参者とは反りが合わず、常に対立する直情型の武将である。

「大覚屋英真」だいがくやえいしん

師真の四つ下の弟で大覚屋の跡取り。兄師真のような縦横無尽の才略には欠けるものの、その思慮深く、篤実な人となりで多くの人に一目置かれる。兄師真の実力を知る数少ない理解者である。父の後を継ぎ、雷を財政面で強く援助する。

「大覚屋曹真」だいがくやそうしん

南京楼で一、二を争う豪商大覚屋の主人であり、雷が赴任するまでは、その財力で南京楼の政治を思うがままに操っていた。正宗にもつながりがある。

「賄羅」がいら

元五丈四天王の一人。身の丈2m以上の体格と怪力の持ち主。狼刃と共に弾正の旗揚げからの宿将。一騎当千の武将で各地を転戦、弾正の死後、対立する玄傑、鳳鳴二将を切り、麗羅を立てて全権を掌握、事実上の独裁者となる。その政治は悪政を極め、五丈の民に塗炭の苦しみを強いる事になる。

骸延（がいえん）

骸羅三兄弟の末弟。武勇一辺倒の兄達とは違い、華玉と共に李張の元で学んだ知謀の士であり、将来を嘱望されていた。兄骸羅の武勇を背景に天下取りを画策し、麗羅を担ぎ上げ五丈中枢を乗っ取る。また、練との秘密軍事同盟を締結、正宗との対決に備える。無類の権謀家である。南京楼の増強を危惧する。

骸山（がいざん）

骸羅三兄弟の次兄。兄骸羅と共に幾多の戦場を渡り歩いた武人であり、無双の剣の使い手である。いわば戦のプロとして今までの生涯を戦陣のうちに送ってきた骸羅軍きっての猛将である。

狼刃（ろうは）

元五丈四天王の一人。知勇を兼ね備えた女将であり、雷の才能を早くから見抜き、その行く末を温かくかつ厳しく見守る。女傑正宗に刺激され、南天進攻の先鋒を買って出て雷にその先陣を任し、麾下の第三軍を率いて南天に雪崩込む。戦後敗戦の責任を取らされるが、後復職。雷に南京楼赴任を勧め、時を待つように諭す。

玄偉（げんい）

五丈四天王の一人で辣腕の謀臣。帝国崩壊後の戦乱の中、元帝国側の有力な武将であったが、早くに帝国の再興に見切りを付け弾正側に寝返り、弾正に重く用いられる。骸羅の反乱の際、死んだはずが…。

麗羅（れいら）

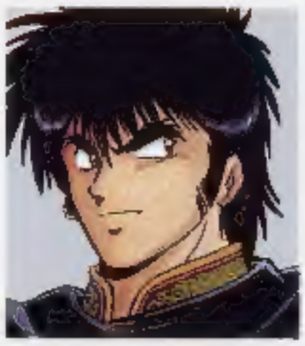
男勝りの五丈の王女。弾正という強大な権力を背景に我がまま放題である。雷には興味を持ち、紫紋とよく対立し、反乱の罪をかぶせて殺そうともした。弾正の死後、骸羅と結び五丈を乗っ取る。

羅候（らこう）

練国国主。父羅鶴の死後、兵権を受け継ぐ。最初は南天の大国、智に従属していたが、徐々に勢力を広げ、正宗にも一目置かれる存在になる。南蛮王国王女、呂峻を嫁取り、その地盤を強固なものにする。後に雷と共に竜虎と並び称される。

姜子昌（きょうししょう）

練国きっての名将。若くして、練軍の大都督に任じられ、羅候を補佐し練国の発展に尽力



する。正宗による早期銀河統一を阻止するべく画策、幼主虎丸を立てて正宗を失脚に追い込むのに成功する。

邑峻（ゆうしゅん）

南蛮王琥瑛鷲洲（こえいばす）の一人娘。羅候とは以前から許嫁の仲であった。南蛮王国との連携を強めるために羅候の元に輿入れする。百人に及ぶ女兵士を従えるなど相当なじゃじゃ馬ではあるが、花嫁修業は熱心だった。得意料理は七色餃子のてんこ盛り。

諦虎（ていほう）

練の若き武将。練国は先王羅鶴以来の宿将達と、羅候の代に頭角を現した武将達に大きく二分される。後者の代表が姜子昌で、その彼の右腕とも言われるのが参軍校尉諦虎である。知勇に秀でて、智、五丈、南蛮に囲まれた羅候を助け奮闘する。

独眼竜正宗（どくがんりゅうまさむね）

父先代正宗の死後、弟虎丸を擁して智の国の国政を司る。女将ながらその戦略、行動力で、南天連合軍の盟主として五丈の南征を頓挫させる。戦後、南天最大のライバル明を攻め滅ぼし、残る趙、孟を併合し練にも服従を強い、事実上南天を統一する。五丈の政変を期に、一気に銀河統一に乗り出すが、同盟国の練に背かれ、国内が混乱し失脚してしまう。

虎丸（とらまる）

正宗の弟。智の嫡子である。国政、軍事を姉正宗に全て任せているが、正宗の命により練の羅候との修好のために義兄弟の契りを結ぶ。

正宗としては羅候に枷をはめたつもりだが、逆に姜子昌に利用され、正宗失脚のために智王に祭り上げられる。

飛竜（ひりゅう）

正宗の側近で知恵袋。親衛隊長として常に正宗の側にあり、犬馬の労を惜しまない。弾正の南征においても的確に正宗を補佐し、雷の猛攻より正宗を守り抜く。弾正の余命の短い事を予見し、また羅候の動きに警戒するよう正宗に進言するが…。

丁儀（ていぎ）

正宗の叔父に当たる人物であるが、その度量の狭さと執心深さを嫌われ、虎丸の後見役を正宗に譲る羽目にな

り、政治的には何の力も持たない。しかし、権力への執着心は強く、羅候らの誘いに乗り、正宗失脚の陰謀に荷担する。

【李張】りちょう

弾正の元軍師。弾正の挙兵と同時に弾正に軍師として迎えられ、その覇業に大いに貢献。引退して隠居生活している今も、五丈軍に対して隠然たる力を持つ。その弟子には華玉、骸延など知謀の士が多い。銀河の覇者の出現を予見している。

【華玉】かぎょく

玄偉の腹心。李張道師の高弟でその秘められた力で玄偉に適切な助言をする。弾正の死期を予測し、玄偉を天下人にするため、同じく骸羅の知恵袋の骸延としのぎを削る。雷の台頭を恐れて、密かに亡き者にしようと刺客を南京楼に送り込む。骸羅の反乱の混乱時以来、生死不明。

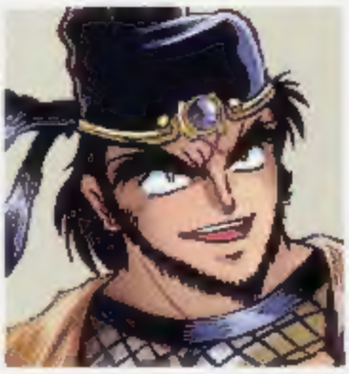
【蘭々】らんらん

華玉の妹。共に李張の元で学ぶ。道士としての能力は未知数だが、今は紫紋の元で身の回りの世話をしている。幼い割にはしっかりしていて、荒くれ者の印象がある雷の元に嫁ぐ紫紋の身を案じていたが、今では雷を少し見直したようである。

【項羯】こうえん

南京楼軍の勇将。以前、帝国の武将であったが、軍内の腐敗と派閥争いに嫌気がさし、野に下った。南天との国境近くに根拠を持ち、部下二千を従える大海賊として暴れ回る。やがて雷の度量の大きさに感服して帰順、齢七十になんなんとするが水を得た魚のように活躍する。真の主君を得たという事であろうか。

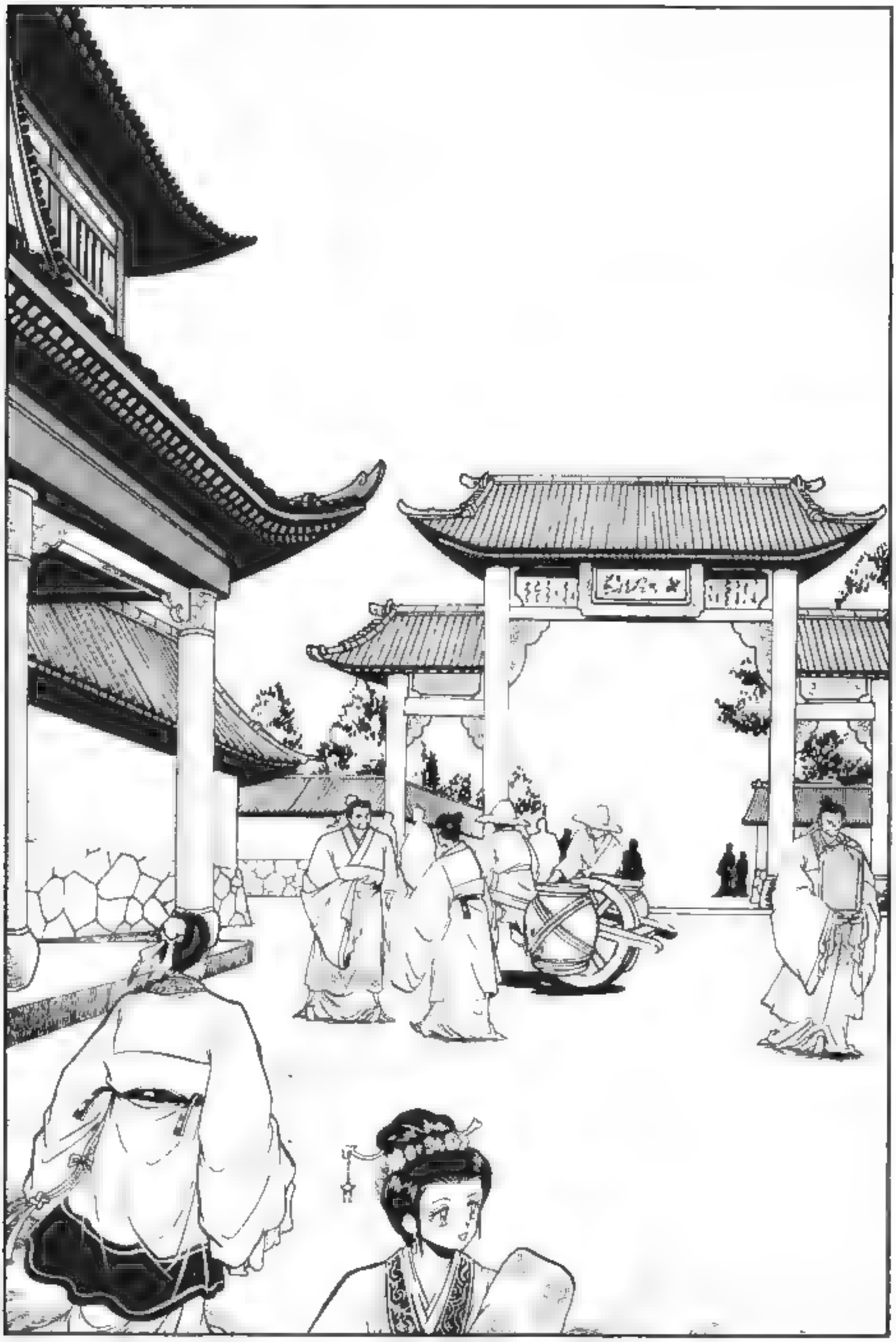
【項武】こうぶ



項羯の息子で怪力無双の暴れ者。八十斤はあろう大斧を片手で軽く振り回す豪傑である。父と共に雷に帰順し、その武勇を買われ、常に先鋒を任される実戦部隊の親玉という役柄であった故に、多分に深慮遠謀に欠けるところもあるが、千軍万馬の強者である。

【林則徐】りんそくじょ

南京楼軍の謀臣。若い頃は風采も上がらず誰にも相手にされずにいたが、城内に出入りしている間に師真に見い出され、雷輔翼の人物として師真と双璧をなす。だが師真の言う「覇」には疑問を持つ。

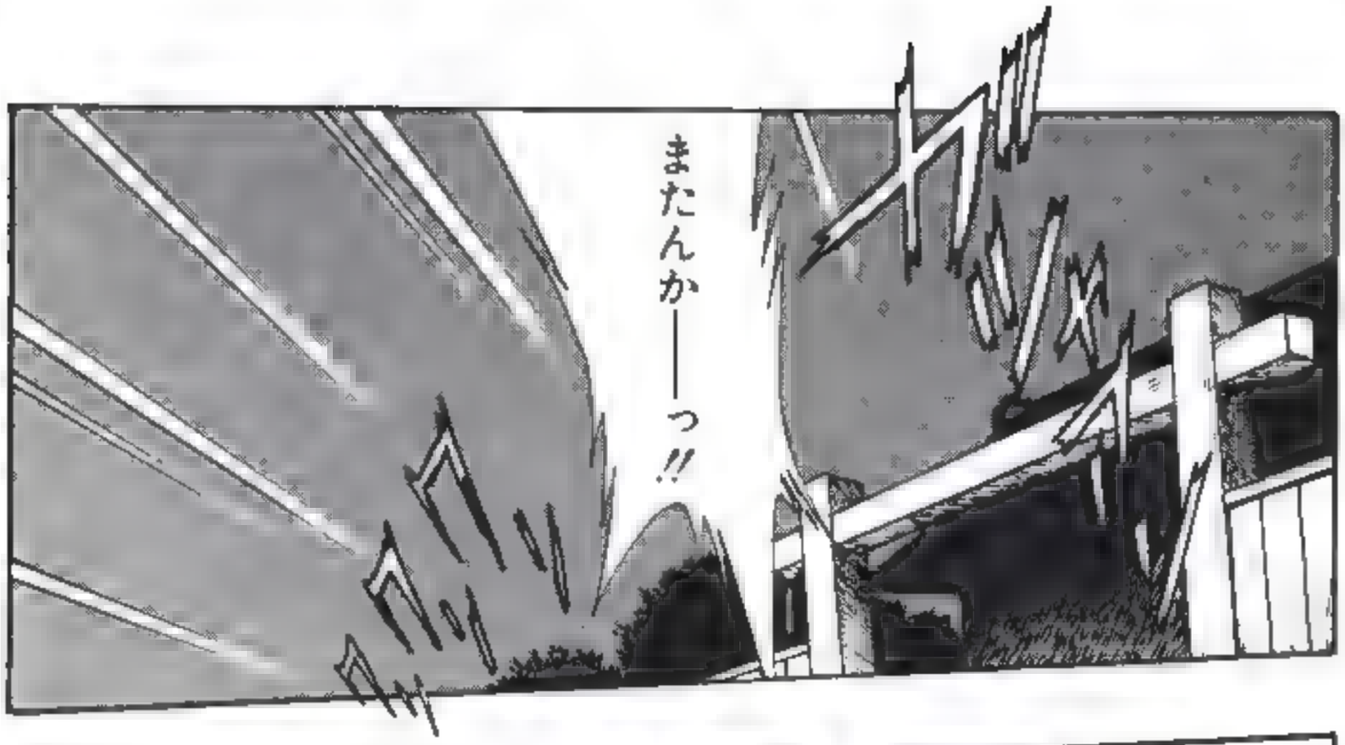


……
我が家といえども敷居が高えや
やっぱ裏に廻るわ
兄さん！
ここまで来て何言ってるんです！

いいしゃねえか
今日のとこは
都合が悪いって
ことでよ
いいえ
だめです!
父上にきつく
言われてるんです!
とにかく
父上に
会って
下さい!
おいっ
こら離せって!
バカ野郎〃
おいっ
みんな
手を貸してくれ!
わ――っ〃

ようやく
連れてきたか
はい父上
はなせバカ
師真！
なんだよ
おまえ
貿易商の
周家の
息子夫婦を
知っておろうな
周家
～～～？
師真様
今日は
泊まって
いけるの…

旦那は？
今日は寄り合いで羽郷の方へ
明日まで帰らないわ
師真様…!!
とうとう捕まえたぞこの売女が!!


またんか――っ!!

その不義の相手は
大覚屋のせがれだと
申して
おるそうじゃ
もちろん
その妻も とかく
噂のある女で
人違いということで
何とか
いいつくろったが
覚えが
あろう
師真!

忘れた!
何じゃと!
いちいち
んなこと
覚えて
られっかよ
星の数
数える様な
もんだぜ

どのみち
うまくいかない
夫婦だったんだろーし
引導渡してやったって
ことじゃない
俺は
知らんけど
勘当だーっ!!
おまえと
大覚屋の縁も
これまでだ!!
二度と
敷居を
またぐことは
許さん!
今後
何をしでかそうと
わしは関りは
もたんからな!
大覚屋を
名乗ることも
許さんぞ!!
あら〜〜〜

けっ
なんでえ
あんな骨し
すかしを
言うために
俺様を呼んだ
のかよ
ったく
とんだ
骨折り損
だぜ！
兄さん
知りませんよ
父上マジで
怒ってますよ
わはははは
酒だ!!
酒と女
どんとん持ってこい!!

ホイ!!
いてて
くそ〜〜〜っ
親父に
ツケといて
くれっていったら
これだもんなぁ
勘当されたの
知れ渡って
やんの
しかし
酒も飲めん
女もだめとなると
こりゃ
少々深刻だぞ

ふあぁあ…
といって華の南京楼で荒川の土手で昼寝してるのもなぁ。
紫紋ちゃんはガード固いし。
あ——あんなに身持ちが固い女も珍しいな
兄さん！
！

なんだ
英真か
捜しましたよ
店はとーした
若旦那
さぼって
きました
おいおい
知らねーぞ
よく昔
ここで
遊びましたね
学問所がいやで
ここて昼寝して
時間を
すごしたり
ここらは
あの頃と
全然変わって
ないな
もっとも
兄さんは
学問所なんか
二月たらずで
やめちゃい
ましたけどね

そーいえば
兄さんは

グ――

怒らないで
聞いてくださいね
父上は
何も兄さんが
嫌いだとか
店の名が傷つく
からとかで
勘当したんじゃ
ないんです

兄さんが学問に
秀でてることは
いつも父上の
自慢でした

父上は
兄さんが
この銀河で
やろうとしている
ことを
わかっています

だけど
ぼくたち
商人は
兄さんが敵と
見なす側とも
つながりが
あるかも
しれません

この戦国の世
商人は
あらゆる群雄と
密着しようと
します

もし
兄さんが
店のことを
思うばかりに
天下の大計を
誤ってしまうと
したら・・・
それだけは
さけてほしい・
父上は
そう考えて
おいでです
ぼくも
兄さんには
私縁なんか
忘れて
思う存分
この銀河で
活躍して
ほしい
大覚屋の
看板なんか
忘れてほしい
んです
あ
そうだ
父上から授かった
ものが
兄さんの才能を
買って
幕下に入ることを
求めた国からの
書状です
父上は
この中から
・・・・・・・・・・・・

よいしょっ
あっ…!!
親父は
商才はあっても
銀河の明日を
見抜くことは
できなかった
ようだな
じゃあ
その中には
兄さんの意と
する者が
いなかったと
いうことですか
小石の中から
珠を見い出す
ことが
天下の大計の第一歩だ

ふあ
なんか
ノド乾いたなー
ノド
乾いたな——
でも
金ないしな
——
わかりましたよ
その代わり
ぼくも付き合うから
女抜きですよ
おまえな——
女を知るのも
天下の大計に
必要なんだぞ
天下に
いろいろ
あるみたい
ですね——

おや
若旦那
お珍しい
今日はまた
お早い
店閉まい
ですな
奥
借りるよ
なんだよ
お前いつも
こ——んな
小汚いとこで
飲んでるのか？
ええ
だって
こーいうとこの方が
気楽でしょ
たく
兄弟こーも
趣味が違う
もんかな
お——い
親父——っ〃
冷やでいいから
どんどん
持ってこーい〃
こーやって
兄さんと
酒飲むのって
久しぶり
ですよね
そーいや
初めて飲みに
いった時は
おまえ酔って
風呂桶相手に
相撲取って
ゲロ吐いちまった
よな
あれは
兄さんが
ムチャクチャ
飲ますからです
死ぬかと
思いましたよ

ははは
こーいうとこで
飲むのも
悪くないな
でしょ
ところで
兄さん
せっかく二人っきり
なんです
どうでしょう
ここは一つ
兄さんの天下に
対するお考えを
お聞かせ願えま
せんか
へ――
おまえも
そーいうのに
興味があるのか
そりゃ意外だな
兄さんの考えは
勉強になります
からね
ふん
いいだろ
天下を語るには
ちっとばかし
騒がしい
ところだが

銀河は広い…
これを
治める
のは
容易では
ない

銀河帝国末期
帝政が
無きに等しく
天下が乱れること
もう百年近い
いまや
どこの長老とても
戦乱の世の以前の
世界を知らん
この俺とて
書物で
読むのみだ

良識も
道理も
ない時代に
なったわけだ
つまり
過去の常識しか
知らぬ奴は
到底
天下に臨むこと
などできん
今必要なのは
大乱という地を得
人民の血を水とし
己の野望を肥にして
育つ人間だ

正義や
信義には
あえて目を
閉ざし
〝覇〟を求める男が
必要だ！

天下を制するは
〝力〟のみ！

あらゆる
常識を
失った今
単純な力のみが
残った

今は
一刻も早く
天下を平定する
ことだ

正義は
その後でも
遅くない

それで
人民が
ついてくる
でしょうか

英真
これは人民革命
じゃない
上からの
革命だ

人民は
あくまでも駒だ
戦うのは武将
だけではない
人民も戦乱の中では
一兵士になる

＊帝王を補佐するに足る才能。またはそれを持つ人

覚えておけ
天下を
平定するのは
自分のためでは
なく
人民のためでもない
それは
我々の〝明日〟の
ためだ
お――い
親父――っ!!
そのために
は
〝今日〟の苦しみは
耐えねば
ならん
〝力〟ですか
じゃあ
兄さんがこの銀河に
なす役目は?
俺は儒者では
ないからな
人の道を説くなど
する気はない
俺がやるのは
〝力〟に知謀と
法と理論で
武装させることだ
〝王佐の才〟に
甘んじるのも
悪くはない

軍師として
力を振るう
わけですね
前も言ったな
俺はこの頭だけで
天下を取るってな
俺は
軍師として
その〝力〟の持ち主を
自由に操って
みせる
俺の目的達成の
ための
道具としてな
俺はよ
天下取りで
得られる富貴や
官位なぞに
興味はねえ
あるのは
ただ一つ
自分の知謀で
銀河を動かせるか
どうかって
ことだ！

はは
いやあ
酒の勢いて
バ――ッと
しゃべりすぎた
かな
まあ
そんな
とこだ
最後に
一ついいですか
もうよせよ
女の話でも
しないか？
酒が
うまくなるぜ
兄さんは
さっきの
諸侯からの
招待状を
破り捨てました
いったい
いかなる人物が
兄さんのいう
〝覇〟を求める
男なんてすか？
おもしれえ
おまえこそ
これと
思う奴を
あげてみろよ
じゃあ
女将ですが
智の独眠竜
正宗！
今やその勢いは
天下に並ぶ者は
いないでしょう
ブ――ッ
はずれ!!

たしかに
知勇には
秀でてるかも
しれんが
組織者としては
失格だ
今に国を
割ることに
なるぞ
じゃあ
練の羅候は？
あんなの
兵馬を持って
有頂天に
なってるとこだ
まだ小さいな
じゃあ
五丈の骸羅ですか？
兵力は強大
知恵袋に骸延
兵を率いては
狼刃・骸山と
人材も豊富です
兄さんのいう
〝力〟の持ち主
では
ありませんか
あま――い
人材は
そろっていても
それを活かす力が
骸羅にはない
弾正の盛名を
借りた
寄せ集めの
政権よ

こーみると
銀河広しと
いえど
ろくなのが
いねーな
はあ…
じゃあ
ここの太守
竜我雷も
だめてすか
ちょくちょく
お会いしてるん
でしょ
竜我雷…
あいつか
初めて
会った時のことを
思い出すぜ
あんたかい
姫さんが世話に
なったってのは

今聞いたよ
礼を言うぜ！
俺が
震えてる
この男…！！
俺はあの時
全身に冷や汗が
流れるのを感じた
なぜか鳥肌が
立つ思いだった
まあ
固苦しいことは
なしだぜ
座ってくれ
一杯やろーぜ

あの時
俺を迷え
させたのは
何だったのか
戦場を駆け巡った
男の持つ
殺伐としたものとは
違うなにかが
兄さん！
ん…
どーしたんです
だまりこくって
いや
別に…
で
どーなんです
竜我殿は？
はっ
この話は
またにしようぜ
続きが
聞きたいな
！

雷！
なんで
おまえが
こんなとこに
いる!?
いちゃ
悪いの
かよ！
おまえこそ
珍しく女っ気
なしのとこで
酒飲むんだな
うるせー——
これは弟の
趣味だ
てめえこそ
太守のくせに
みみっちい酒
だな
太守って
いうが
俺もついこの間
まで一兵卒だ
こーいうのが
合ってんだよ
な——
太助
うん!!
第一
おまえ
正宗と
ドンパチ
やってたん
じゃ
ねーのか
こんなとこで
油売ってて
どーする!?

ありゃ
羅候の反乱で
正宗が退い
たんで
おしまいよ
動員令も
解除されたし
兵力の補充も
しないとな
それで
帰ってきたのか!?
なんだ
帰っちゃ
悪いかよ
バ――カ
なんで正宗を
追わねえんだよ!!
知るかよ
追うなって命令だ
仕方ねーだろ
あ――
それじゃ
手負いの虎が
一匹出来た
だけじゃ
ないか!!
だれた
そんな命令を
出したのは!
南遣軍
総司令官
驃騎元帥
狼刃様だよ
狼刃?
おい
元帥を
呼び捨てに
するなって!

なるほど
狼刃か
ふん
ふん
なんだよ
一人納得顔
するなよ!
五丈の
指揮系統は
混乱してるよー
だな
もし正宗を
討ったなら
五丈の
天下制覇も
夢じゃ
なかった
ろうに
それを狼刃が
意図的に妨害
したのなら
狼刃は
五丈の天下を…
いや 骸羅の
天下統一を
嫌ったって
ことだ
ポケー
そーすることで
じゃあ狼刃に
どーいう利益が
あるのか
はたまた
他に利を得た
奴がいるのか
おもしろく
なってきたぞ
じぃ〜っ

なんだよ
なんだよ
不思議なもん
見るような顔
するなよ！
いや
おまえよく
そこまで
考えるな
わかんねえのか？
おまえも一応
一軍の将だろ！
つまりだな…
……
うん
うん
クス

手負いの虎が
一匹出来た
だけだ！
わたしが
何のために
苦労して
〝練〟との同盟を
結んだと
思っている！
我が敵は
正宗一人だ
これを倒せば
天下は黙って
いても 転がり
こむんだ！
こんな
機会は二度と
なかった〃

骸延
もうよせ！
とにかく
勝ったんだ
祝いの席だぞ
ここは！
勝った？
これを勝利と
いえますか!!
いいですか
兄上！
作戦を立てたのは
わたしです！
作戦が徹底
していないのは
わたしの責任に
なります！
しかし
作戦は
全軍に行き渡って
いた！
それでも兵が
動かぬは
その将の責任です！
なにとぞ
軍法により
狼刃元帥を
お裁き下され！
!!
!!

狼刃は
このわしが
國軍総司令に
任命したのだ！
その資格を
とやかく
いうのは
このわしへの
批判ととるぞ!!
お待ちくだされ！
軍は法によって
成りたちます
例え君主で
あろうとも
ええい
まだいうか！
聞きたくない！
下がれ!!
兄上!!
下がれと
いって
おろうが
わからんか!!!
ははあ——っ!!

まったく…
酒が
まずくなる！
スッ
骸延殿は
あたしが
兵権を
握っているのが
気に入らない
ようだね
いやあ
すまんな
あいつは
頭は切れるんだが
どうも
頭固でな
わしは今回
おまえの取った
行動は
正しいと
思っておる
どうも
作戦の
徹底も大事だが
将には
臨機応変さが
必要だ！
机上の策だけ
では 今の世の中
通用せん！
練と智が
共食いして
くれれば
わしの天下は
ますます
強固になる
わはははは!!

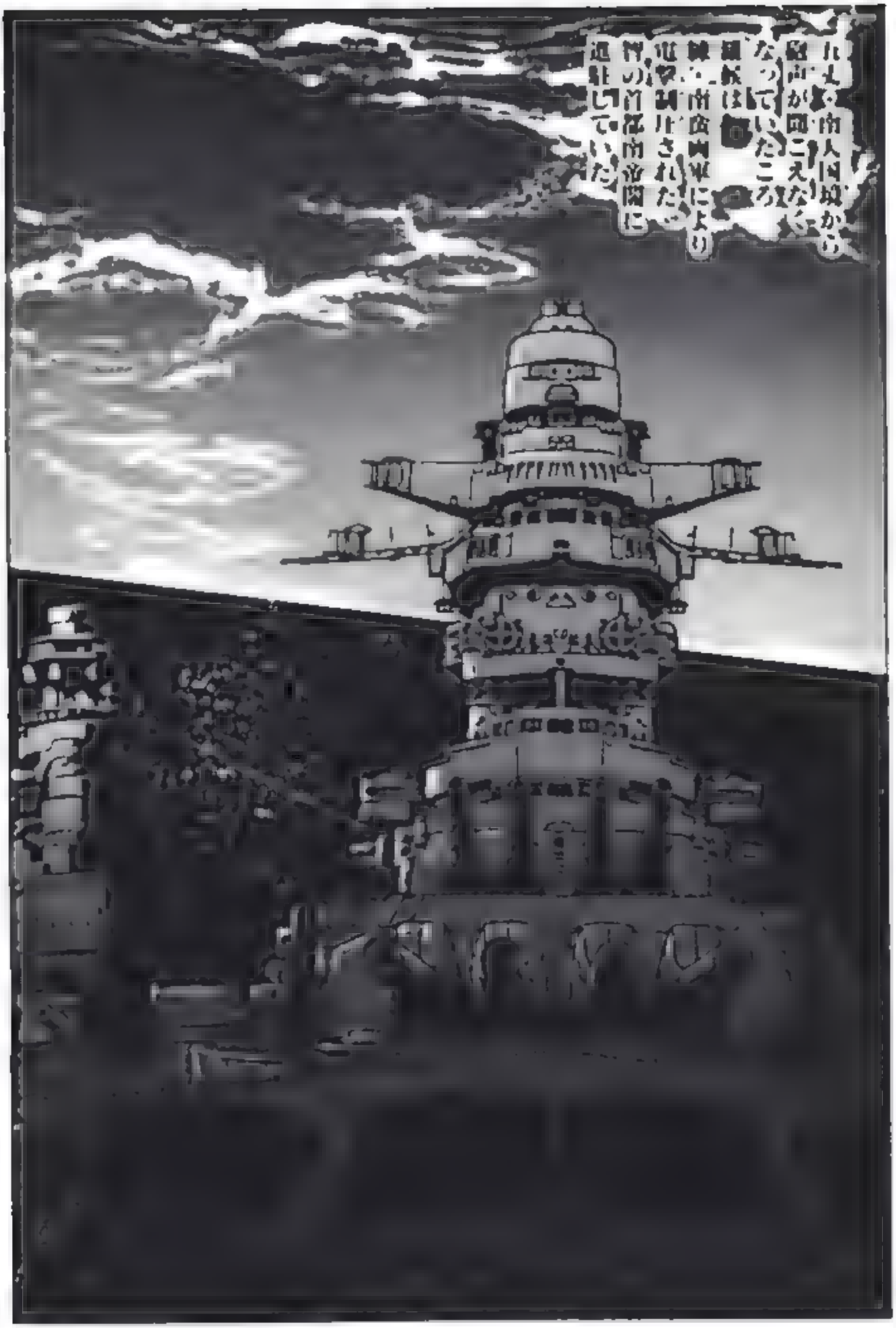
うう～～～
なんという
ことだ！
兄上は盲目的に
狼刃を
信じすぎる…
軍法で裁けぬと
あっては
自ら狼刃を
亡き者に
せねばなるまい
だが軍権を
握っている狼刃を
いかに倒すか
だが…
骸延様!!
なんだ！
はっ
実は おりいって
申しあげたい
ことが
おりいって？

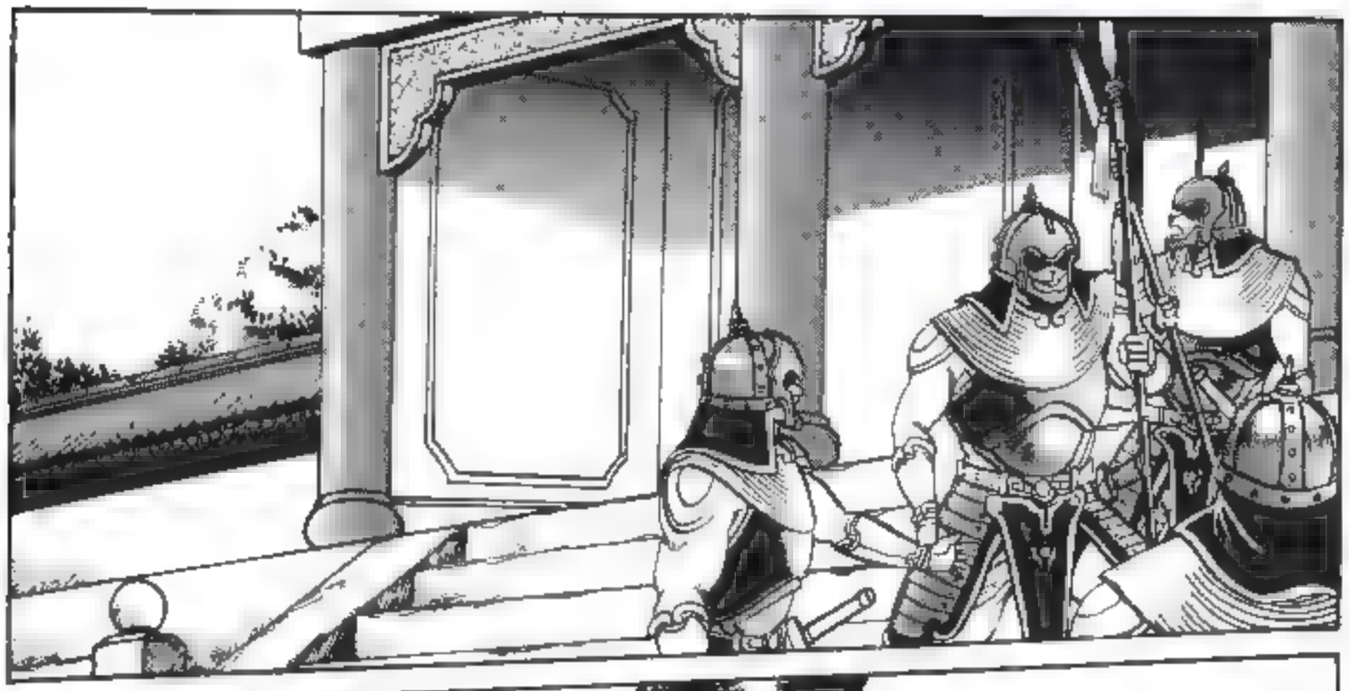
なにいっ
玄偉の首が
違うだと!!
どーいうことだ
それは〃
はっ 実は
まもなく
あの政変より
一年
それを期しての
首改めの
準備にとりかかって
いたところ
取り出した
塩づけの首が
どうも
玄偉の顔に
見えません
バ
バカな〃
わたしも
そう思い
検死官である
この男に
首を見せました
て
とうなんだ〃
はっ
骸延様
あれは
明らかに他人と
思われます

ところどころに整形された跡もあり
あれは巧妙に似せた影武者…!!
……
このことについて知っているのは?
もちろん極秘中の極秘!わたしとこの検死官のみてす
そうか…
なら外部にもらすことは許されんな!

ひいいっ!!
何をなされます!!
何ということだ…!!

玄偉が生きて
おるだと……!!


北天の南人国境から
砲声が聞こえなく
なっていたころ
国妖は
陸・南蛮両軍により
電撃制圧された
智の首都南帝関に
進駐していた



のう
姜子昌殿
貴殿のおかげて
やすやすと
この南帝閣を
手に入れたが
あの正宗が
だまっては
おるまい

五丈との
挟撃も
連中が
動かなくては
おしまいじゃ
このままでは
わしら
枕を並べて
ここで討ち死に
しかねんぞ
な
何か
よい手は
ないのか？
ご安心を
丁儀殿
元々五丈軍など
あてには
しておりません

我々には
練の国主
虎丸君が
おられます

形式上臣下である
正宗殿が
若君に弓引けば
この智には
おられますまい

確かに
今となっては
虎丸君が
最後の要
しかしそれで
正宗が矛を
収めようか

それは
正宗殿次第
まもなく
ここへ
来られましょう

な なに
正宗が
ここに!?

案ずることは
ございません
丁儀殿

城内を
掃き清め
水をうち
文武百官に
礼服をまとう
ように
お伝え下され

わ
わかった

何で
来たんだ!
ついてくるなって
言ったろうが!!

ああ 確かに
閉じ込めたのは
悪かった
あやまる
よ
けど
戦ってのは
女が
出てくる
もんじゃ
ねえんだよ
悪かったって
言ってんじゃ
ねーか!!
言いたい
ことは
それだけ?
ドドド

新婚早々
あんな扱い
されちゃうんだもん
あれで怒らないほど
あたい
鈍感じゃないわ！
けと
おまえが
来ると
作戦が
そうでございます
姫様
今が正念場て
ございます故
なによ――っ！
みんなで
あたしを
邪魔者に
して――っ〃
あ　いえ
そういう
わけでは
と　とにかく
こうここに大挙して
押しかけられちゃ
全てが水の泡だ！
第一
何だよ
この女達は!?
あたいの
親衛隊よ
父様が寄こして
下さったん
だから！

聞き分けのない
ダンナのお尻
引っぱたく
ためにってね♡
……
あ　うそうそ！
大丈夫だって
羅候強いから
女兵士百人くらい
どうってこと
ないもんね——
大事に
してくんなきゃ
やだよ♡
ブリッ♡
わ——かったよ
けど今はまだ
作戦を遂行中だ
くれくれも
騒きを起こさん
ようにな！
何よ
作戦作戦って
言うけどさ！
ブーッ
五丈と一緒に
正宗の首を
あげるどころか
逆にここで
包囲されちゃってる
しゃない！
しいっ！
声がでかい!!
だからなぁ!!
義兄上!!

どう
これ
似合う？
おう
立派だぜ
智の国主と
しての
風格がある
なっ
邑哦！
え？
そう
そうよね
姉上に
会うのが
楽しみだな
正宗殿も
きっと
驚くぞ

さあ
もうすぐ
正宗殿も
到着なされる
丁儀殿も
お待ちだ
正殿の方に
いかなきゃな
うん
そうする
もう
姉上には
苦労を
かけないさ！
……
ねえねえ
これとーいう
こと？
あの子が智の
国主になるの？
へへ
女子供には
わかんねえだろうな
これで俺達は
正宗に勝つのさ
う――ん
よくわかんない
けど
これって
姜子昌の
考えてしょ
羅候とあかいなんて
頭ん中
そんなに
かわんないもん
あ――っ
うるせえよ!!

一方
北条率いる
南天軍本隊は
九丈国境の前線より
急ぎ舞い戻り
南帝閣近海で
軍を再編
練軍と対陣
していた
なに
練の
使者だと？
はっ
いかに
とりはからい
ましょうか？
ふん
我々の留守中に
南帝閣を
盗み取った連中が
今さら
何をぬかす

おそらく
謀叛を起こした
ものの
八方塞がりになり
命こいを
してきたのでしょう
おろかな連中よ！
殿！ 今こそ
その使者を斬り
一気に練軍を
撃ち破りましょう!!
まあ待て
連中は虎丸を
手中にしている
はず
軽々しく
動いては
ならん
ここは
ひとつ連中の
逃げ口上を
聞いてみよう
練国
参軍校尉
諦庖に
ございます

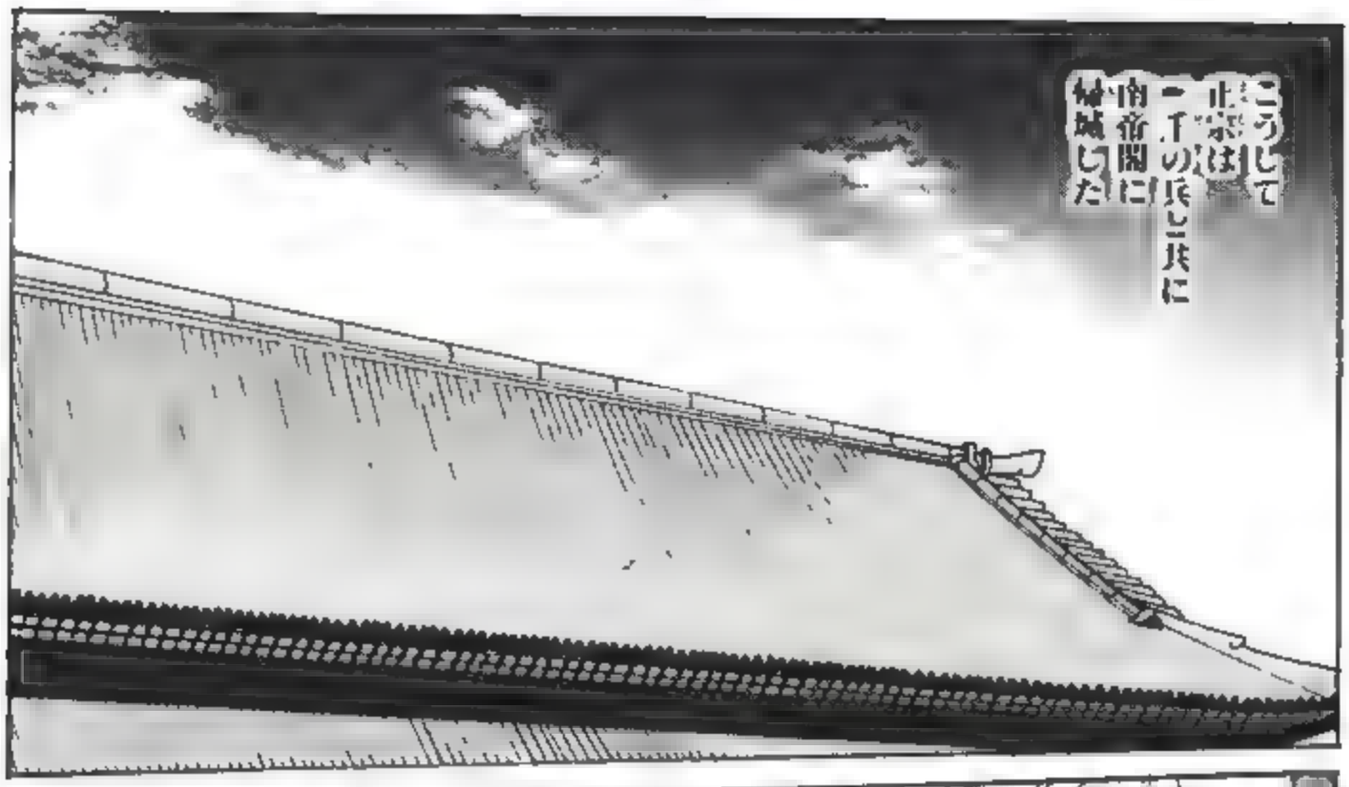
おう
ご苦労だった
ご使者の
ご用向きは
何かな
此度の
北伐の断念
まことに
遺憾にございます
な…なにを
ぬけぬけと〃
きさまらの
謀叛が
あったからだぞ〃
五丈と内通して
おったのは
明白じゃ
確かに
五丈に内通した
謀叛は
ありました
だが
我々が全て
鎮圧いたし
ましてございます
鎮圧した
だと？
どーいうことだ！
今さら言い逃れは
できんぞ〃
これは驚き！
正宗様は
我が殿が
謀叛を
起こしたと
お考えなの
ですか？
我が殿を
それほど仁義の
薄い男と
お思いか！
ああ
情けなや
我が殿と
若君虎丸様とは
義兄弟ですぞ！
ならば
謀叛のこと
詳しく
説明してみよ

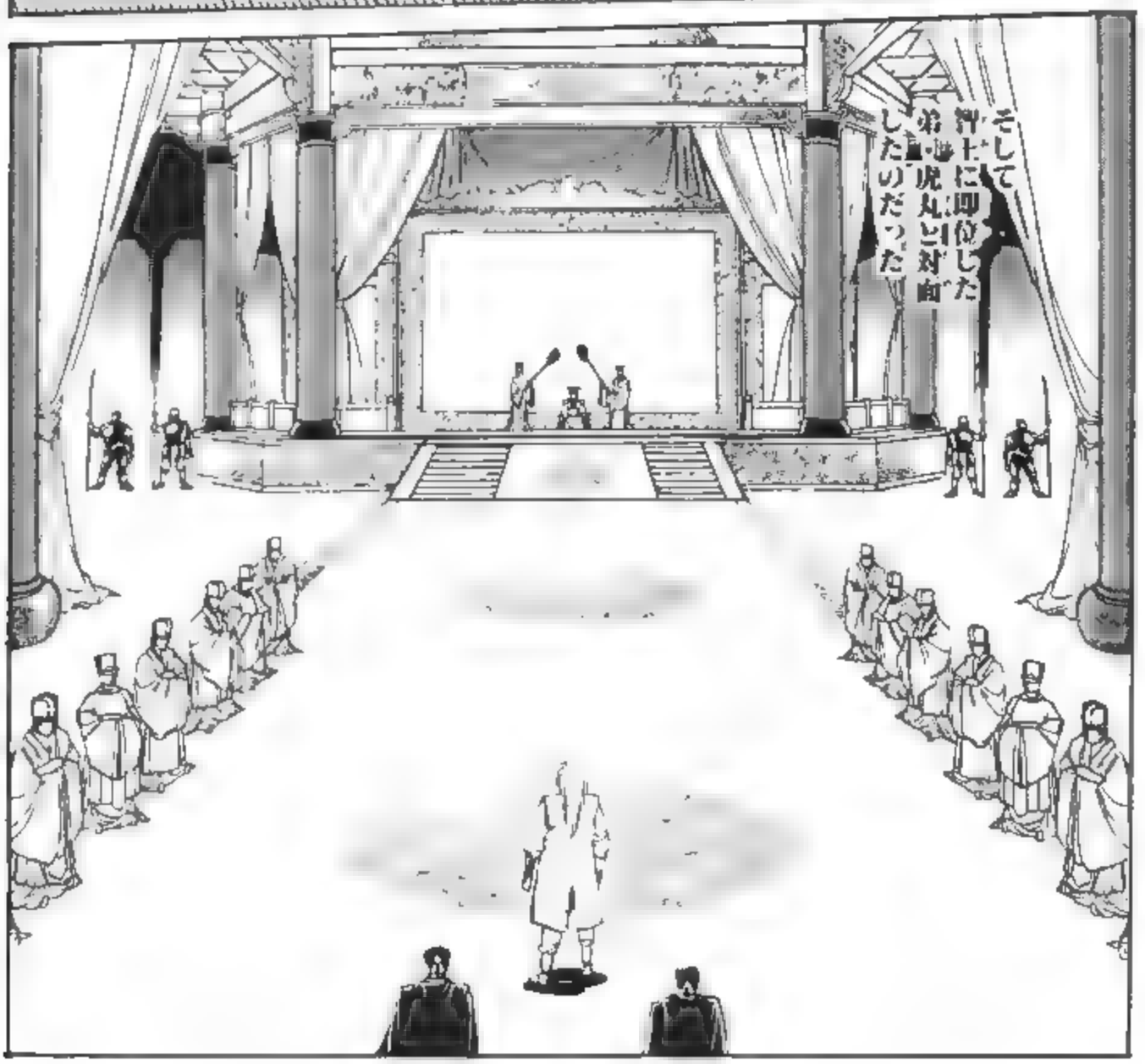
ズ
ズ
ズ
ズ
すると
その反乱分子の
決起は
羅候殿と
南蛮軍が
鎮圧したと
そう申すのか
はっ
主なき
首都の危機に
我が殿は
すぐに虎丸君を
智王にお立てになり
治安を
回復させました
その反乱分子
とは？
それは
正宗様直々に
ご検分なさって
下さいますよう
捕らえております
なお
誤認により
一部軍勢の
衝突が
あったことは
まことに
遺憾で
ございました
ご使者殿！

虎丸を
即位させたと
申したな…！
はっ 正式な
手続きを踏み
あとは正宗様に
預けられて
おります
王の印綬を
受け取られる
だけで
ございます
いかがでしょう
ここは直ちに
正宗様に
ご入城いただき
正式に
新智王より
出師のお言葉を
いただき
再度出陣
されては
主あっての
国が自然な
姿です
我が殿も
都を掃き清め
ご入城のおりに
ただちに明け渡す
つもりで
ございました
ふふ
さすが使者に
選ばれただけ
あって
弁は立つようだな

何か
それかしい
申したことに
不明なところが
ありましたか
いや
彼は
通っている
たが
あまりにも
うまく
通り過ぎて
いる〃
そちの
真意が
知りたいな
私は
使者として
両軍の誤解を
解くために
一命を賭けて
参りました

和解ならずば
この命
投げ出すまで
です
ふ…
蹄虎殿
よくわかった
南帝閣に
参ろう
殿！
早速の
お聞き届け
感謝いたします


こうして
正宗は
二千の兵と共に
南帝陣に
帰城した


そして
将士に即位した
第■皇児丸と対面
したのだった

姉上!!
おおっ
虎丸!
ちょっと
見ない間に
背ものびたな
姉上には
お変わりなく
もう
姉上には
苦労は
かけません
ぼくが
先頭に立って
がんばります
うん
よく言った
亡き父上も
喜ばれるぞ

正宗
叔父上！
此度の
南帝闇ての
反乱騒き
この正宗の不徳の
いたすところて
こさいます
いやいや
大きな騒きに
ならずに
すんだのじゃ
まずは良かったのう
なにしろ
羅候殿が
すぐ駆けつけて
くれてのう
いや
そうでも
なければ
智を根底から
揺さぶるところ
しゃった
！
正宗公
久し振りだな！
はじめ、
勝手に戦列を
離れたことを
お許し願いたい
首都に
不穏な動きあり
と耳にして
取るものも取らず
駆けつけたのでな
いや
貴公の働きが
なければ
五丈の思う壺で
あっただろう

国内での反乱を
異国の軍隊が
鎮圧するのも
なにかと思って
虎丸を智王に
立てたってわけだ
俺たちは
その智王に
力を貸しただけさ
つまり
即位とはいえ
また仮の
即位てな
とうしゃな
こういう謀叛も
長いこと王位が空白に
なっていたことも
一因しゃろう
虎丸の
元服を兼ねて
正式に智王の
印綬を授けては
正宗様！
いいてしょう
そういう時期
てしょう
おおっ
そうか
ならば
早い方がよい
皆の者
新智王の
即位じゃ！
吉日を選び
儀式の
用意をせい！

正宗は当然
この謀殺騒ぎが
丁儀と銀候の
仕組んだことだと
わかっていた

だが今
弟・虎丸の即位に
異を唱えることは
国を割ることになる
正宗にとって
智が天下を取る
ためには
それだけは
避けたかった

お印形様
無念にございます
〃

やがて虎丸は
王の印綬を受け
諸将・八公家百官
そして同盟国である
銀候らの見守る中
正式に智王に
即位した

姉上！
父上や姉上の
苦労を
無駄にせず
必ずやいい政治を
行います
そして
必ずや智による
銀河統一を
なし遂げます！
これから
力になって
下さい
ああ
おまえなら
できるさ
期待
してるよ
正宗は
大将軍の地位は
変わらず
引き続き
軍を統括し
新王を支えていく
ことになるが
今まで
後見役として
自他ともに認める
才覚をふるい
最高実力者として
専断してきた
彼女の前に
身内とはいえ
臣下であるという
大きな壁が
立ち塞がる
ことになる

それより
問題なのは
新王即位により
今まで形骸化
していた
宮廷官吏勢力が
息をふき返し
正宗の
軍事的才能に
心酔する
軍部との対立が
生まれてくる
ここである
正宗が
ガムシャラに
自分の力だけで
国を引っ張ってきた
時代は
終わったのである

これも
天運か…

俺
今になって
おまえの
言っていた
意味が
わかったぜ
正宗に
弱点はなくても
智には国としての
致命的な欠陥が
あるってな

実力の正宗と
形式上の新王：
権力の二重構造って
やつがよ
ああ
これで
正宗い指導力は
激減した
智は放っておけば
割れるさ
戦場で正宗を
討ち取るのは
至難のわざだが
権力構造い
狭間に落ちこめは
それもたやすい
まあ
おまえの好きな
やり方ては
なかった
ろうがな
へ！
さて
明日は
いよいよ帰国だ
今夜は
さっさと寝るか
いい夢
見ろよ
ははは

見事ね
姜子昌
飛竜か
何か用か？
こんなところで
知恵袋同士が
会っていると
かんぐられるぞ
ふふ
野暮なこと
言いなさんな
将軍
今回は
完璧に
やられたわ
人質という手を
使わずに
それと同じ
効果を得る
とはね
おまえなら
俺の策など
見抜いて
いただろうに
い――え
若君の即位
までは
考えが及ばな
かったわ
人質を取るのを
嫌う
羅候の性格をついた
お屋形様の策を
逆手に取る
なんてね
過分な
お誉め
恐れいる
ふふ
変わってないのね
あなた

けど
わたしは
あなたに
負けないわ！
あなたが
羅候を
天下人に
するんなら
わたしは
必ずそれを
阻止し
智による
天下統一を
なし遂げる
！

わたしは
わたしは
必ずあなたを
倒してみせる！
この次、寝首を
かかれるのは
羅候の方よ!!
次会う時は
戦場てね
☆
ああ
いつか
またな

保有艦艇の
修理状況に
兵の補充
再編計画
武王都＿狼刃軍本営
ほほう
よく出来た
報告書だな
だれが書いた？
部下の
三楽斎って
男さ
三楽斎？
ああ
聞いたこと
あるぞ
なかなかの
切れ者だ
そうたな
とにかく
よくやってくれたな
おまえたちにも
いずれ政庁より
恩賞の沙汰が
あろう
兵を休ませ
ねぎらって
やるがいい

ところで
たかだか
報告書を
提出するためだけに
わざわざ
武王都まで
来たのか？
だれか
使いをよこせば
よかったのに
いや
その
ちょっと
相談しがい
ことが
あって
相談？
ほ――
一体
なんだ？
できりゃあ
元帥だけに
話したいんだけど
なんだ なんだ
ここの
連中には
聞かれたく
ないのか？
ははーん
まさか
このあたしを
口説きに
来たんじゃ
ないだろーね
ち
違うって
そんなんじゃ
ねえよ

ならスパッと
言っちまえよ
五丈一の
暴れん坊が
泣くぞ
わ
わかったよ
笑うなよ〃
実は
お預けの身に
なっている
紫紋・いや
紫紋姫の
ことなんだけど
落ち着いたら
元帥のお許しを
もらって
嫁に迎えると
約束しちまって…
それで
もって
ぷっ
くっくっ
くっくっ
くっ
な なにが
おかしいんだよ!!

どわっはははは!!
な
なんだよ
なんで
笑うんだよ〃
俺が
嫁もらうのが
そんなに
おかしいかよ〃
悪い
悪い
しかしおまえが
嫁とは
しょ
しょうがねえ
しゃんか〃
惚れちまったん
だからよ〃
惚れたあ?
この口が
そんなこと
言うとは
考えつかな
かったぞ
いでででっ〃

まあいいだろうおまえも一軍の将になったんだ
嫁をもらう資格はある
日を選んで式を挙げるといい戦いに明け暮れたおまえだたまには息抜きもいるだろう
じゃあ許してもらえるんだな!!
嫁さん泣かす幸せにしてやれよ!
おう!!
式にはここにいる連中全員呼ぶからよ!!
ははは

寺第十
わはははー
そーかー
おまえがついに嫁をもらうか!!
そんなに笑うなって!!
いやこんなにめでたいことがあるか!!
そうかとうとう身を固めるか――!!
こんなボロ寺だ何もないが今日は朝まで飲もうぜ!!
すまねえな苦労させちまってよ

いやなに
こーいうのには
慣れてるからな

大した
苦には
ならねえが

ただ
戦の話を聞くと
ムズムズ
しちまってよ！
あー
大暴れ
してえもんだ!!

ボリ..

退屈だろーな
わかるぜ

で どうだ
ここ最近の
都の様子は？

うん
街ん中見りゃ
わかるだろーが
だんだんひとく
なってくな

活力ってのが
なくなって
いきやがる

太常府の
骸羅らが
やり始めた
王宮や陵墓の
建設に
莫大な金と
人間を
使ったからな

いくら
豊かな都と
いえども
限界があらあな

話には聞いているがかなり過酷な労働らしいな
たくさん人が死んだって聞くぜ
ああおまけに法がやたら厳しくてな金持ちの商人らはみんなそれにやられて家財没収よ
南京楼への献上金の要求も日増しに重くなってきてるぜ
正宗もこーいう状態を見越して攻め込んで来たんだろーが
どっちにしろこのままじゃ五丈は瓦解するぜ
それにもっと気になることがある
この散財の原因は麗羅姫にあるってうわさが流れていてな…
ん？
え？

亡き弾正公の姫だということをいいことに太常府らに無理な要求をしてるってな
街角にそれを弾劾する檄文を見かけたこともあるぜ
そのうわさって本当なのか？
まあ あの性格だし贅沢好きだろうしなまんざらうそでもないだろう
う――ん やばいなあ領民の怒りが姫さんに向けられたら
それにあの太常府がいつまでも姫さんを立ててるわけがない
利用価値がなくなったら容赦ねえだろ
領民の怒みの根源を絶つんだ太常府の株が上が
まさかあの虎野郎それ狙ってんしゃないだろーな！

わからんな
そのうわさだって
どこから流れたのやら
まあ
とっちにしろ
近々都は
荒れるぜ
頼むぜ雲海
その時は
あの姫さんを
守ってやってくれ！
俺は
最前線だし
おまえだけが
頼りなんだ
ん――
まあいいけとよ
苦手なんだよな
あーいう女
けといいのかよ
紫紋姫と
結婚する身で
他の女の
心配なんか
してよ
それと
これとは
話が別てい！
俺は
亡き殿に
軍体で
頼まれたんだ
姫を頼むってよ
今じや遠い
南京楼に駐屯
してんけとよ
できる限りのことは
してやんなきやな

あの姫さん
宮中でも
腫れ物にでも
触るかのような
扱いだろうし
俺以外に気を
許せねえって
言われたらなぁ
グリグリ!!
いろいろ
女に頼られるな!
この色男が!!
いてて!
やめろって!!

わはははは
そうか
羅候めが
やりおったか
はい
新王が即位し
正宗の権力は
弱まりました
もう
今まで通り
自由に兵を
動かせない
でしょう
新王なんそ
まだ青二才だ
放っておけ
後で
羅候共々
威ほしてて
くれるわ

ふああ
これでわしの
天下も決まった
ようなもんだ
そうと
わかったら
眠くなったわ
よし
一眠りしたら
祝いの宴た
用意しとけ！
ははっ
グオ――ッ
骸羅…！
うん・
だれだ？

!!!
げ…
玄偉…!!

骸羅よ……

何を
怯えている
自分か殺した
男の顔を
忘れたか
もしも
おまえ
と
ては
何百万人の
人たちの
かのかも
れないな
おのれ
玄偉!!
まだ
ウロウロして
いやがったのか!!
死人は
死人らしく
とっとと
消えちまえば
いいものを

そうもいかん
きさまの
悪行の数々と
その惨めな
末路・・・
それを
見定めるまで
今しばらく
この世に
留まるつもりだ

俺の末路だと
何寝ぼけた
ことを
言ってやがる！
ははは
わかったぞ
きさまくやしいのだな
まだ帝位に
未練があるか!!
この世の
春か
短かろうて
・・・
!!!

利いた風なことぬかすな玄偉
天下は俺のものだ
俺が天下人なのだ!!
引導渡してやらあ
消え失せろ!!
まっかな
ほざくな!!

おのれ
逃げる気か!!
ひ ひいいっ!!
修羅様
お気を確かに!!
うおおおっ!!

あああ!!
玄偉
とこだ——っ!!
とこへ
行ったあーっ!!
玄偉!!

兄上〃
そこか――っ!!
ガキィィン!!
兄上!
俺だ
骸山だ!!
弟の顔を
忘れたのか〃

玄偉〝この死に損ないがあ〟
げ…玄偉？
うが――っ!!
わあああ!!
くわっ
死ねぇ――っ〟

太常府様!!
あ…兄上!!
う――っ
冷てえ…
兄上!!
しっかりして
くれ!
目を覚まして
くれ!!
なんだ
おまえたち?
何を
集まって
るんだ?
兄上?

な 何も覚えて
いらっしゃら
ないのて
ございますか?
何もって
う
兄上!
頭が
頭が痛い〃
割れそうだ
早く寝所へ!
典医を
呼べ!!

兄上
お早う
ございます
おう骸山か
早いな
ご気分は
いかがですか
いや
よく寝たからな
すこぶる
いいぞ
どうも昨日は
悪酔い
しちまった
ようだな
最近
体を動かして
おりませんからな
狩りでも
なさっては
いかがです
そりゃあいい
たまには
外の空気を
吸うのも
いいもんだろ
時に
骸延は
いつもとる?

はっ
地方巡視は
ほとなく
終わるはず
間もなくでしょう
奴の頭が
また必要に
なるやも
しれん
天下は
目の前だ！

たが戦闘は
速川のように
玄偉の思を
超うように
流れ回った
玄偉
きさま
どこへ
逃げやがった
出てこい
そこか――っ
近習のものを
次々と斬り捨て
殺れ切って
血の海に
横たわるまで
誰一人近づけない
始末であった

兄上が乱心!?
しっ 声がでかい〃
とにかくひとい暴れようでなとても俺たちの手に負えんのだ
いったい何があったんですか原因は!?
それがな俺も信じられんのだが現れるそうだ〃
現れる? 何が……
あの男だ
俺たちが殺したあの男玄偉だ〃
玄偉…!!!

ゴロゴロゴロ
玄偉が
玄偉が兄上に
ゴロゴロゴロ
とにかく
その幻覚を
見ない時は
ひどい頭痛に
悩まされて
それこそ
七転八倒の
苦しみよう
どうした
ものやら
そんな
はずはない

ん？
しかし
信じたくはないが
こりゃ怨霊か
なにか以外
説明が
奴は
生きて
いるんです!!
な!?
ゴロゴロゴロ…
ばかな…
そんな
ばかなことが
あるか!?
奴の首を
斬ったのは
この俺だぞ!!
俺もつい最近
知ったんだが
あれは替え玉
だったんです…!

か
替え玉 !?
もとより
生きているのなら
怨霊も現れる
はずがない
おそらく
術者の
仕業でしょう
兄上に
何らかの
術を
術？
そんなことが
人間にできるのか!?
できます
高度な修行を
積んでいるならば
おそらく

とにかく
玄偉が
生きてるなら
一大事だ！
兄上に報告
しよう！
待って
下さい！
今しばらく
このことは
内密に
この城中では
我々二人だけの
胸のうちに
しまっておく
べきです
なぜだ!?
生きているのを
知れば
兄上も怨霊に
悩まされまい！
兄上が
知ることになれば
たちまち全銀河に
玄偉のことが
知れ渡ってしまう
ことになる
まだ骸羅王朝の
礎も固まらんうちに
反乱の口実を
与えるような
ものですぞ…！
とにかく
今は我々だけで
玄偉とその残党を
始末しましょう
騒がれては
まずい…！
だが
兄上の容態が
ゴロゴロゴロ
ご安心を…
この手の
人を惑わす術は
人の心の隙間
気の緩みを
衝くものです
わたくしに
おまかせ
を！

ウーーッ!!
兄上
ただ今
戻りました
おう
ご苦労
どうだった
巡視は?
ムチャ。
はっ
御威光は
五丈の隅々まで
行き渡って
おります
兄上が天子の位に
登るのを
今か今かと
待ちわびてる
様子でしたぞ

はっはっは
それはいい
気分がいいぞ！
ところで兄上
少々
お疲れの
ようですが
そう見えるか
実は最近
いやな夢ばかり
見てな
よく眠れんのだ
それに
ひどい頭痛もだ
それは
困りましたな
医者も
原因は
わからんと
ぬかしおってな
ったく
役に立たねえ
ヤブばかりだ
ははは
この骸延
多少
そちらの方にも
心得がありますゆえ
恐らくそれは
気の病です
原因は
この宮殿
でしょう
この宮殿は
亡き弾正公が
建てたもの
はっきり言って
陰気臭いし
方角も悪い
ここは
新たな宮殿を
造営し
遷都いたし
ましょう！

ここ武王都は
あくまでも
五丈の首都
やはり
銀河帝国の首都は
古来
斉王都と
決まっております
兄上にとっても
このような都
惜しくは
ありますまい
斉王都は
今、焼け野原
ですが
これは
もっけの幸い
兄上の
偉業を称える
大宮殿を
お建てになり
後世の人々に
知らしめる
のです！
これをもって
真の新王朝の
出発となりましょう
なるほど
確かに
この宮殿は
もう古いな
だから
気がめいるのだ
よし
都を移そう！
骸廷！
城造りは
おまえにまかす
金に糸目を
つけるな！
度肝を
抜くような
大宮殿を造れ
人夫なんぞ
何人使っても
かまわん！

ははは
久しぶりに
いい気分だ
酒をもってこい!!
その新殿で
わしが
帝位に
つくのだ!!
華王の奴
この骸延の
目の黒いうちは
好きなようには
させんぞ…!!
リッ
はて
邪気が
緩んだぞ
骸延の奴
さすがじゃな

華玉!!
そんなことするためにわしの元で修行を積んだのではあるまい!!
よいなもうするな!
ったく
やれやれわしの元で学んだ一二の弟子が敵味方に別れるとはな
困ったもんじゃ
ところで紫紋姫からなにやら書状が来ておったのう
簡々の奴ちゃんと奉公しておるんじゃろうな
何!! 結婚式の招待状!?
こりゃよいわいい酒も出よう
いこいこ

南京楼
南大国境での
砲声も絶え
この南京楼にも
一時の平隠が
訪れていた
この柄が
いいかしら
はっさすがは
紫紋様
柄といい艶といい
お似合いです
ねえ
雷
とうかしら

俺に聞くなよ自分が着るんだぜ
紫紋が気に入ったんならそれにしなよ
なによちゃんと見てよほら！
どれもこれも同しように見えっけどなー
も——
太守様はいかがですか？花婿衣装の方は
俺はこれでいいよ
だ——めよそんな普段着！あたしが見つくろってあげるから
あ——まかすまかす
やれやれ結構めんどくせーもんだなー
結婚ってのはようー

竜我様
おう
三楽斎
おおっと
これは
お美しい
姫君の
可憐さが
いっそう際立ち
ますな
こらっ
つまんねえこと
言ってねえで
用件はなんだ
実は
!!
孟闇たちが？
はあ
広間に
集まって
おります
わかった
行こう
紫紋
悪いが
ちょっと用事だ
はい
どーしたの
かしら
あんなに
あわてて
ね――
姫様
これすっごく
きれい♡

なんだ
なんだ
どーしたんだよ
みんな
しかめっ面
して
いや
申しわけ
ありません
せっかくの
めでたい日が
近いのに
こんな顔で
実は
太守の
客の男の
ことですが
師真の
ことか？
師真が
とーした？
いやそのはっきり申しまして迷惑しています
何かしたのかあいつ？

ご存しないのですか？
あの男
家を追い出され
太守の好意で
ここに転がり込んだはいいが
食客扱いをいいことにやりたい放題てすぞ
連日昼間っから女を連れ込み宴会騒き
台所女から役人たちの女房にまで手を出す始末……
太守があの男の才能を買われるのはわかります
確かに頭はいいそいつも認めます
しかしこうも品行が定まらないようでは部下への示しもつきませんそ
いや～～～頭がいいのもどうだか
小才がきくだけかもしれねえしな
机上の空論なら兵法をちょこっとかじってあれば誰でも唱えられる

あ――
まったまった
あの男の才能はこの三楽斎が保証しますぞ!!
おめえの保証なんぞあてになるか!
ひっこんでろ!!
孟閣おまえはどう思う?
才能は…あるでしょう
しかしああまで乱れていては軍律を守らせる方としては…
ますいか?
は…

追い出せと
言うんだな
おまえたちは!!
は
まあ
平たく
言えば
!!
師真のことは
しばらく
俺にまかせて
くれ
悪いが
少々のことは
大目に見て
やってほしい!

頼むよ
そこまで言われちゃ
なあ
ああ
わかりました 太守におまかせいたします
おう ありがとよ
……

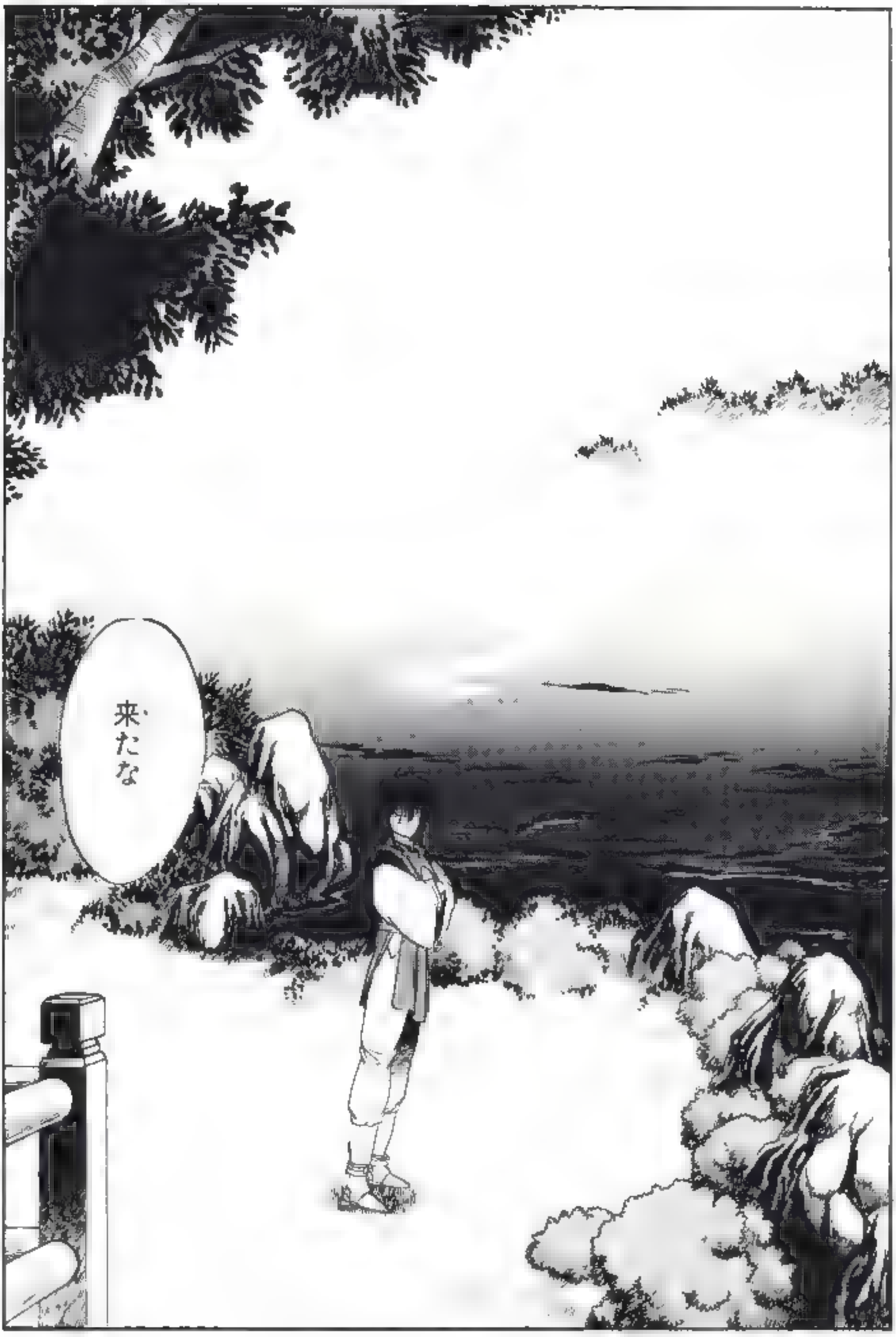
何
他の連中が
俺を
追い出そうと
したあ？
竜我様の
「俺にまかせろ」
という一言で
みな引き下がり
ましたが．
やばいですよ
しまいに
竜我様でも
かばいきれなく
なりますぞ
俺は別に
ただ酒
飲んでんしゃ
ねえぜ
何せ商人の
子だからな
ちゃんと
払うもんは
払ってる
金ですか？
しかし一文無して
ここに転がり
込んだんては？
バ――カ
ここだよ
ここ！

雷は俺に
酒と女を
振る舞う
俺は奴に
天下取りの
方法を教える
どうだ
いい取り引き
だろ
天下取りの
方法ね・・
そりゃ
高価だ
だろ?
さてと
ラーん!
どこに
行かれるの
師真様~~~
もっと
おもしろい
とこ
え~~~~
どこ~~~~?
雷の
とこさ

やだ
師真様と
太守様って
どーいう関係
なのかしら?
三楽斎!
ん?
おもしろいぜ
雷に天下取りの
方法を教えるのはよ
快感だ!
……

そうだ
快感だ
あいつと
話してるだけで
俺は
快感だ〃
こんな気分には
なったことがない
この満足感は
人にはわからんだろ
俺には
あの男が必要だ！
俺が
天下に踊り出る
ためにだ！

どうしたら
よいのか
正しいことなのか
悪になるのか
それは
わからんが
ただ
俺はと
人に言うことか
できる
できるはずだ!!
太守は?
殿、
お待ちして
おります


来たな

我が軍師!!

俺はおまえに賭けるぜ…!!
おまえのその野心に満ちた鋼の目になな…!

英雄は英雄を知る……
ここに雷は大覚年師直という希代の天才を幕下に得たのだった

俺はどーもあーいう男は好かん！
遊び人風情に何ができる
そう言うな鐘士元俺だって腹に据えかねてるんだぜ
一体太守はあの男のどこがいいんだよ
最近は寝食をともにするほどだぜ
ちいとばかし頭が切れるって話だがそんなもん実戦で役に立つかよ
そんなことになったら俺たちの今までの戦いは何だったんだってことになるぜ
もうよせよ言っても始まらん
そうはいくか！奴は軍師としてこの城に招かれたんだぞ！
血も見たことねえ奴が俺たちに命令するんだぜあーしろこーしろとな!!

冗談じゃねえぜ！ったく
そうは思わねえか姫文！
確かに素人が指揮を取るとなると兵が不安にかられるな
軍ってのは団結が第一だ
見知らぬ余所者にかき回されたくねえだろ
これから大事な時だからなあなんとかしなくては
けっなーにすぐに化けの皮剝いでやるぜ！
おい見ろその張本人のお出ましだ
！

ようご両人！こんなところで立ち話かい
けっまた女連れかよ
てめえこそ何しに来た！
何しに来たはねーだろ今晩もとーだ？麻雀
相手してやるぜ
あっ悪い悪いそーいやあんたいつも一人負けだったよな
こりゃ失礼
なにおっ〃
でけえ口たたきやがって〃何様のつもりだ〃

雷の軍師！
うるせえ
俺はおまえ
なんかを
軍師とは
認めねえぞ!!
こらこらこら
女性の前で
わめくんしゃない
おびえてる
しゃねえか
さあさあ
お帰り
この怖い
おっさんに
食われちまうぞ
戦にも
出たことねえ
遊び人が
どんな才で
軍師を名乗る!?
言ってみろ!!
一つ!!

全銀河を
見渡し
遠大なる
戦略構想を
立案する才
二つ！
その戦略論を
現実に戦術面で
実現させる才！
そして三つ!!
事ある時は
その機を見定め
天文を見
風候を悟る才！
どーだ
この三つの才の
うち
一つでも
俺に勝てるか？
これて
俺が軍師やってる
理由がわかったろ！
う

そ…
それだけか!!
俺は
この刀の牙えに
かけちゃ
誰にも負けん!
兵を率いては
常に先陣を
任され
敵を破った!
その俺に
お前は
指図する気か!
なら
あんたは
その才を生かせ
な……
その点に
おいては
俺はあんたと
競うつもりはない
あんたが
自分の才を
充分発揮
してくれるんなら
俺も助かるって
わけだ
軍隊ってのは
そーいう
もんだろ?
俺は軍師
あんたは将だ
相乗ねる必要は
ないさ
う
う
う
納得したか
鐘士元!
!

孟閣！
真昼間から
大声上げて
手柄比べも
ねえだろうが！
軍師殿
太守がお呼び
ですが
そうか
俺も行こうと
思ってた
ところさ
おい
お前たちもだ
一緒にこい！

師真！
天下を取るには
「天の時」
「地の利」
「人の和」が
必要だと
聞いたが
俺には何が
欠けている？
ギリギリギリ…
三つともだ

おいおい
全部かよ
そう！
天下人への
道は厳しいぞ～
軍師殿
それは
言いすぎ
ですぞ
竜我様は
南京楼という
豊かな根拠地も
得ているし
人が
いねえとは
言わさねえぞ
俺たちしゃ
満足できんと
言うのか!!
まあ
待てよ
まず
「地の利」だが
確かに
この南京楼は
豊かだし
雷はここの
支配者だ
だがそれだけで
この南京楼を
得たとは
言えんだろ
戦ってのは
総力戦だ
軍隊だけの
戦いしゃない

あらゆる人民が
産業が
天下取りのため
総動員されなきゃ
ならないってことき
その体制が
できていない今
「地の利」はないと
思わんとな
どうすれば
いい？
法だ
法！
法によって
南京楼の国力を
国家体制に
組み込むんだ
法とは
単なる法規 禁令
じゃなく
国の方針や
政治目標を
指す
それを
人民に徹底
させるんだ
なるほど
法ね
じゃあ
「人」の問題は
とーなんだよ〃
あんたたちは
一騎当千の
武将だ
俺だって
自分の才には
自信がある
一万や二万の
軍勢なら
それでも
よかろうが
一国となると
そうはいかん

人材不足か？
数をそろえりゃいいもんじゃない
質が大切だ
身分 家柄なんか気にせず才ある者を登用し強力な家臣団を作る
彼らをよく用いることこそ「人の和」って奴だ
おわかりか鐘士元殿！
えあ
ああ！
この南京楼で老いさらばえたくなければ今言ったことをただちに実現しなきゃなんねーぞ！
俺たちはまだまだ小さいんだからな
おい大した見識だせこーいうもんじゃねーのか軍師ってのは
へっまだまだわかるかよ！
最後に「時」たが挙兵するのはその「地」と「人」が固まってからってことか？
もちろんそれもあるが

間もなく
北の都に
一人の偽帝が
現れる
偽帝？
骸羅が天子の
位につくって
ことかよ！
その
偽帝討伐こそ
「天の時」だ！

お――い
よう師真
今日はえらく
早いな
夜の間
こいつを
書いてた
見てくれ
なんだこりゃ
えらく長い
文章だな
俺が作った
この国の法律の
準備稿って
とこかな

おーい
だれか
いるか！
はっ
こいつを
書記官
総動員して
写し
城内と町の
各城門に
貼り出せ
そして
こう
付け加えろ
この文に
一字一句でも
書き加えるか
削るかできた者は
名乗り出よ
金百を与える
とな
ははっ
ただちに
とーいうことだ
そりゃ？
なーに
才のない者は
金欲しさに
必死であの文を
読んでくれる
だろう
もし手を加えた
奴がいたら
大したもんだ
登用してやればいい
人民には法が
知れ渡り
人材の発掘にも
なるのさ

お前は
足軽から
ここまで
きたんだ
譜代の家臣なんか
いねーからな
この南京楼での
家臣団が
お前の作る国の
中核となるせ
その中核に
なってくれよな
師真
へっ
俺みたいな
遊び人が
軍師に
なったんだ
他の連中も
「なら俺に
だって」と
集まってくらぁ
はははははは

ザワザワ
なんだ
こりゃ
なんでも
新しい
法律だってよ
それにしても
たくさん
あるなあ

見ろよ
この文に
一字でも加えるか
削るかでも
てきたら
金百たってよ！
金百〃
すげえっ！
俺にも
読ませろ〃
いて
押すな〃
誰か読んで
くれ～～～っ〃
こうして
人々は
先を争って
法律を読み
さらに
書きなす者も
続出した
また
おれいに
同じ合う
町中に
あふれた
やるなあ
さすが
兄さんだ

やがて
何十人かの
学識のある者が
名乗り出た

ほとんどが
取るに足らない
書き加えだったが

その内容に
かかわらず
雷は彼らに
分け隔てなく
金を与えた

人民に
功あれば
政府は必ず
報いることを
知らしめる
ためである

もちろん
中には
見事に
文章を修正し
その才を
買われた
者もいた

彼らは
すぐに登用され
そこでも
期待通りの
才を発揮し
後に重職に
つくのである

たが
軍は得やすくも
将は求め難し
というように

軍の再編中でもあった
雷にとって
孟陽らに続く
人将の出現が
待ち望まれた

とっておきの豪傑がおりますぞ
本当か？だれだ
項羽 項武という親子てす
項羽 項武 聞いたことあるな
今どこにいる？
いや その場所なんてすがね
あ――思い出した そいつら 国境周辺を ナワバリにしてる 海賊じゃねーのかよ〃
おい いくらなんても 海賊相手に 豪傑もあったもんじゃねーせ
いえいえ 私は彼らを よく知っています

親父の方は
元軍人で
戦歴も
なかなかの
ものですが
軍内の派閥争いに
嫌気がさして
退役
今や
部下八千を率いる
海賊の大親分様
ですよ
その息子項武の方も
怪力無双の勇士
でしてね
この二人を大将として
招くなら
大いなる助けに
なりますぞ
えらく
詳しいが
会ったことが
あるのか？
いや――
私も南京楼の
守備隊長として
けっこう
痛い目に
会いましてね
そら
おまえが
弱すぎたんしゃ
ねーか？
彼らとて
この激動期に
海賊のまま
朽ち果てる気は
ないでしょう
私が行って
口説いてきます
口説ける
自身は
あるのか？

はっ
道理を尽くせば
彼らも
わかってくれる
でしょう
じゃあ
まかせるぜ
兵は
どれくらい
いるか？
いえいえ
兵なんぞ
連れて行ったら
生きては帰れ
ませんよ
鐘士元殿を
一人お借り
いたします
俺が？
なんで俺が
おまえの
お供しなきゃ
なんねえんだ！
おやおや
怖いんですか
鐘士元殿？
バ バカ言うな！
たかが海賊じゃ
ねーか!!
どうだ
師真？
いいんじゃ
ねーの
身分は
問わねえんだ
強けりゃ
いい
それに
そこらへんにいる
水軍や
敗残兵の中にも
使える奴が
いるだろう
海賊で将になれると
わかりゃ
自ら集まってくる
絶好の宣伝になるな

それでは
ただちに
出発いたします
朗報を
お待ち
下さい
おう
まかせたぞ！

おらあ
キリキリ
歩け!!
痛えな
そう
こづくな!!
おい
三楽斎
こりゃとーいう
ことだ!!
とうって
案内して
もらって
るんてすよ
どこがだ!!
おまえなんかと
組んだのが
まちがい
だったせ
丸腰でいい
なんて
言いやがって!!
おい
そっちの野郎
うるせーそ!

ドカーン
お頭のおなーりー〜〜
よう三楽斎久し振りだな
その後変わりはねーようだな

こいつが
海賊の
親玉項焉か
面構えだけは
大したものだな
あっちの
若者が
息子の
項武ですよ
ギロッ
けっ
親子そろって
ヒデー面！
三楽斎
わざわざ
わしたちに
会いに来るとは
いくらおまえでも
酔狂が
過ぎねえか？
いいや
今日は
おぬしたちに
話があってな
話だと？
帰順を
勧めに来た

ギャハハハハ
ゲラゲラゲラ
うるせえ
笑うな!!
わっはは!!
これが
笑わずに
いられるか
そーいや
南京楼の太守が
代わった
そうだな
そいつの命令か
そりゃ?
いいや
違う
天下が
おぬしを
必要と
しているのだ
天下が?
おぬしいつまで
こんなところで
海賊なんか
してるつもりだ
自分の才を
その程度だと
思ってるのか?

今は
天下争乱の時
各地で豪傑たちが
覇を競っている
この時に
おぬしだけが
こんなところで
安眠していて
どーする？
それとも
ここの頭っていう
安楽椅子が
お気に入りか？

なんだとお～
きさま
わしが
老いぼれたと
言いたいのか！

そうは
思いたくは
ないが
こんなところで
丸くなってる
あんたを
見てるとな

おまえたちも
そうだ！
海賊やって
命を落とす
ぐらいなら
もっとましな
死に方を
したいと
思わんか〃

だまれ!!

きさま
いかにも海賊を
裏んでるように
言うが
おまえたちの
太守はなんだ〃

前の太守を殺して
居座った
そうじゃねえか！
俺たちと
どこが違う〃

ふ・
そんなこと
言ってる
ようじゃ
小さいな
おぬしは
ならここで
老いさらばえろ
もっとも
間もなく
十万の軍勢が
ここに
襲いかかるがな
何い
っ!!
きさま!
話し合いとか
ぬかして
やはり
その気だったんだな!!
うちの太守は
おぬしを
えらく高く
買っててな
おぬしに
他国へ走られると
困るのだ
よって断られたら
殺さなくてはならん!
よく
考えろ!
自分の才を
天下で試せるんだぞ!!
へえ
こいつ
こーいう時は
結構
腹座ってるんだな

う
親父
ちょっと
待ってくれ！
この男
確かに
口先は達者な
ようだが
とんだ食わせ者
かもしれん！
おい三楽斎！
おまえ さっきから
天下だの何だのと
ぬかすが
おまえたちの主人に
その器量が
あると言うのか
そりゃ
もちろん
その武勇は
聞いているだろ？
竜我雷
だったな
一度手合わせ
願いたいもんだ！
いや——
そんなこと
なさらずとも
この鐘士元て
お試し下され
何——っ!!

鐘士元は
我が軍でも
指折りの武将
竜我様とも
甲乙つけられ
ますまい

てめ――っ
こーいう時だけ
持ち上げやがって!!

俺は
自分より
力のない者に
つく気は
ねえ!

どれほどの
ものか
手合わせ願うぜ

さっ
鐘士元殿
軽くいなして
やりなされ

こ…こいつ～～～っ!!

どうした
怖じ気づいたか
南京楼の軍人は
口先ばかり
なのか

うるせえ
この青二才が!

いいだろ
俺も
南京楼に
その人ありと
言われた
男だ!!

相手してやる
誰か刀を
貸せいっ!!

親父どうだ
この勝負で
俺たちの進退を
決めたらよ

ふふ
そいつは
おもしろい!

つべこべ
言ってねえで
来やがれ！
おまえらが
いつも相手してる
連中とは
ひと味違うぜ〃
ふん
がっかり
させるなよ！
やっちまえ——っ〃
殺せーっ〃

けっ！
何て
ハカ力だ
骨も折れよと
言わんばかりたな
しかも
刀さばきも
さまになって
やがる〃

どーした！
まだ
これからだぞ!!
どおりゃあああっ!!
くっ!!
ふふふ
おぬしの
息子も
成長したな
あ
火くれる？
三楽斎！
……
あんたが
軍を抜けて
この稼業に
ついた時は
乳飲み子だった
のにな
子は
育つもんだ
親としては
嬉しい
もんだろ
ふふ
まあな
将来を楽しみに
しておる

その将来ってのが
自分の跡継きとして
海賊の親玉かぁ
物足りないと
思わんか？
見ろよ
あの武芸！
銀河広しとはいえ
そうザラには
いないぜ
……
子供には
もっと大きな
ことを
させてやりたいとは
思わんかね
うおっと！
ゴロン
もらった――っ”

あああ

息子よ
おまえが
暴れるには
ここでは
狭すぎる
大海に
出るがよい
何!?
では竜我の
家臣になると
言うことか!?
なぜだ!!
わしには
おまえを大海に放つ
力はない
そのわしらに
竜我は
手を差し延べたのだ
鐘士元殿
ケガは
ないかな
や…やばかったせ
なんて野郎だ
親として将来
海賊姿の
おまえより
一軍を率いての
戦場での勇姿が
見たいのだ
親父

そいつは俺が保証するぜ
こんな男の相手をする敵兵に同情するぜ
ニヤ…
お頭一大事だ戦艦が一隻こちらに向かって来るぜ!!
なんだと!!
三楽斎こいつはどーいうことだ!!
あ――そいつは心配いらないぞ!!
先鋒の大将を任せられる勇将を竜我様自ら出迎えに参ったのです
何!太守自らが!?

ゴゴゴゴゴゴ
信しられん
我々のような
者のために
自ら出向くとは
他の
将軍たちでは
考えられん！
そりゃ
おぬしたちを
自分の右腕と
考えてるからな
当然の礼だろ
あ あの～
お頭
俺たちは
どうなるん
でしょうか？
安心しろ
海賊家業の
命知らずどもだ
きっと我が軍の
精鋭になれる
はずだ
太守も
期待している！

こうして
項羽 項武親子は
雷の帰下に
迎えられた
顔を上げてくれ!!
これからは
一緒に戦う仲だ
堅苦しいことは
抜きだぜ
はは っ!
恐れいります
この老骨の
散り際に
一花咲かせて
下さる
太守に
感謝いたします
息子の方も
いい面構えた
気に入った!
うちの
一軍をまかす
大暴れしてくれ!
一軍を
この俺に
?

わかりやした
この俺を
そこまで買って
くれるんだ
やるなと
言われても
やりまさあ！

兵六たちにも
帰順した二人は
それぞれ村に
任命され
やがて市の元で
無償無尽の
活躍をすることに
なる

賢王と共に
南京城軍は
強化されて
いったのである

たが
日に日に
膨れ上がっていく
宙の勢力を
苦々しく見ている
日があった

太常府
骸羅の知恵袋
骸延である！

まったく
虎を
野に放つとは
このことだ〟
恐らく玄偉も
竜我を危険な存在と
知りつつも
すぐには処分
できなかったん
だろう
何せ
後ろには狼刃が
いるからな
中央から遠ざけるのが
精一杯って
とこだ
竜我の
この動き
まぎれもなく
自立い
意志が
見える！
たしかに
一太守として
兵馬を鍛えるのとは
規模が
違いますな
しかも
整然とした
増強た
やみくもに
頭数そろえて
いるのとは
わけが違う
竜我の
芸当とは
思えん

この報告書にある大覚屋師真とは？
南京楼の豪商大覚屋の長男でいろいろ欠点の多い男ですがなかなかの才幹の持ち主と聞いております
竜我の軍師とあるなこやつが黒幕か
竜我雷と大覚屋師真か
虎が翼を得たか…
骨抜きにした旧玄侍軍・鳳鳴軍と違い無傷の狼刃軍は軍監倭延にとって気の重い存在であった
それゆえ兵権を握り自分の軍を宰領化している狼刃に対して倭延は彼女の配下の有力な武将に監視の網をかぶせその動向を密に監視していた
これは明らかに狼刃の管理責任でしょう更迭の口実となりますぞ

いや
だめだ だめだ
この程度で
兄上の
狼刃に対する
信は
崩せまい
それに今
新王都造りに
打ち込んでおられる
兄上の気分を
へたに害すると
俺の命がないわ
がはは
見事だ
気に入ったぞ"

庭には
大海を造り
いながらにして
全銀河の景観を
手にできましょう
うんうん
それは豪華だ
工事奉行！
進行はどうだ
人夫は足りて
おるのか
はっ 昼夜兼行の
突貫工事ですが
何せ規模が
違いますので
何が何でも
年内に落成させい！
人夫の数を
二倍三倍に増やして
働かせろ！
足らねば
役人共も
駆り出せ！
はは〜っ
太常府様
人夫の数も
そうなんですが
実はその
金か
はっ
この度の
大工事
すでに財政は
火の車
てございます
それを
賄うのが
おまえの
仕事だろうが〜

おう
金なら
あるところに
あるわ！
弾正の死んだ後
あやつの陵墓に
財宝も共に
葬ったはず
そいつを
掘り返せば
すむことだ
!!
そ
そんな
亡き殿の
ご陵墓を
あばくとは
よし
人夫一万を
繰り出して
墓を掘り返せ!!
これで
財源問題も
一夜で解決だ
待たれい!!

王威殿
この奸賊めが!!
非道にも
国を乗っ取り
次は主君の
墓盗人か!!
悪行ここに
極まれりだ
この外道めが!!
何いっ!!
この老いぼれが!
わしにたてつくとは
いい度胸だな!
そこまで長生き
してりゃ
本望ってとこか!!
だまれ
きさまの
見せかけの威勢を
誰が恐れるか!!

王威殿！
控えなされ
太常府様に
何たる物言い
さあ
下がりなされ
えい
だまらっしゃい〃
貴公らは
何故そこまでして
この悪党に
媚びへつらうのだ
こやつのおかげで
この五丈は
巨大な監獄に
なってしまった！
民百姓は
涙すら枯れ果てて
おる！
貴公らは
五丈の重臣で
ありながら
亡き主君
弾正公の恩義を
忘れたか〃
さあ
兵士たちよ
五丈の敵は
すぐ目の前
しゃ〃

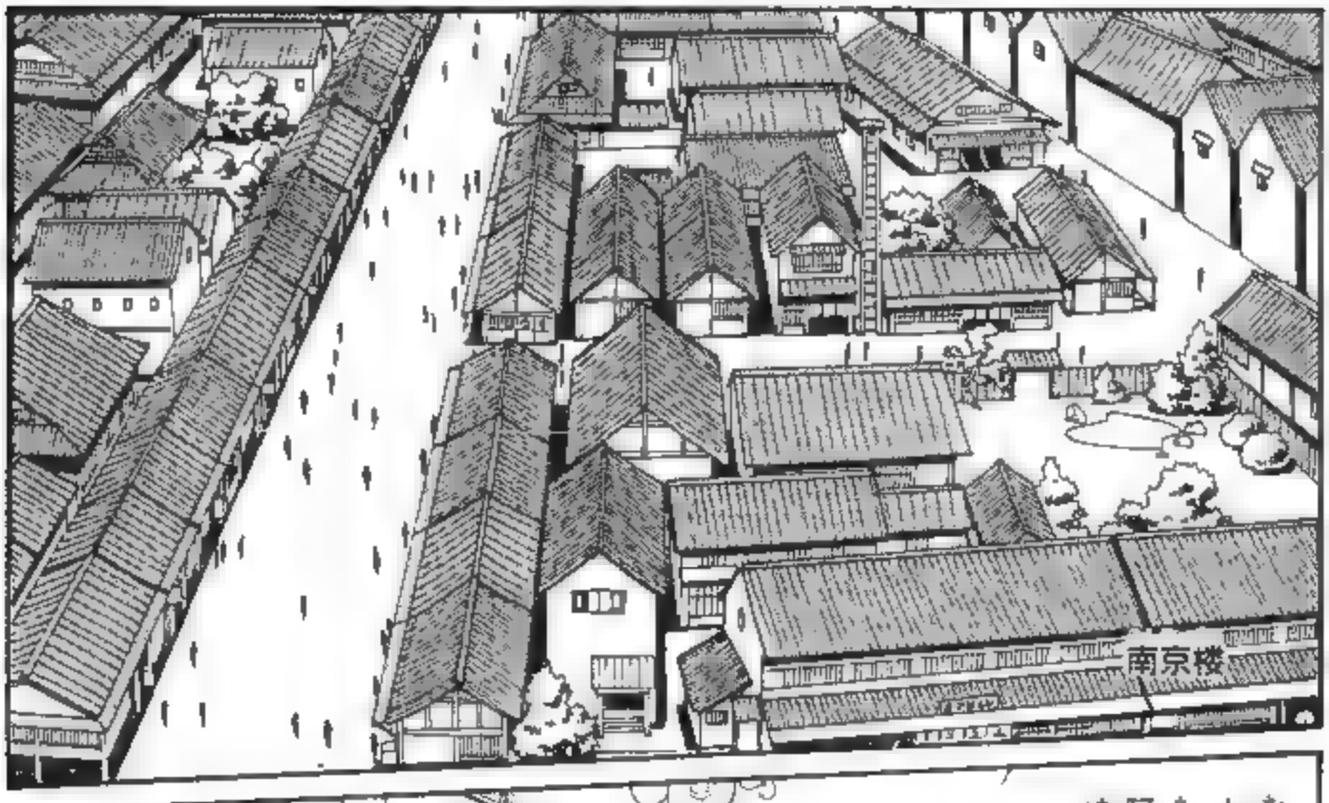
なるほど
おぬしは忠臣
忠義者だのう
うくく
古来
年をくうと
脳味噌が
石のように
固くなると
言うそうだが
ちょいと
調べてみるか
殺せ！
だがわしの
心までを
殺すことは
できまいそ〃
ぐわあっ〃

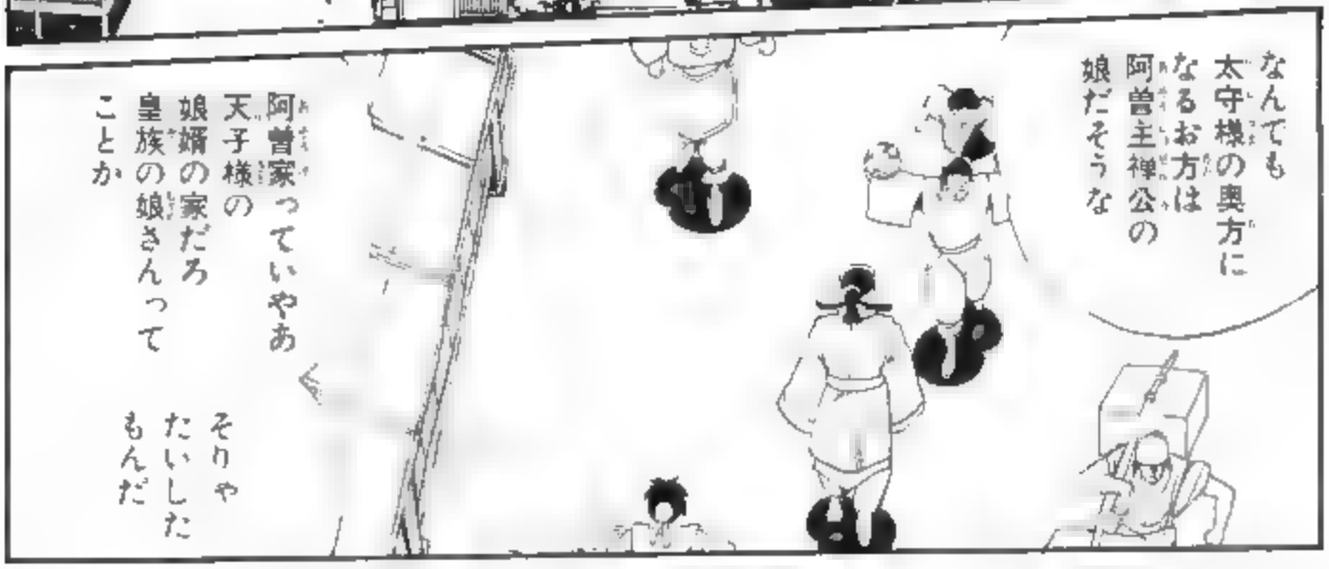
おいっ
誰か
臼と杵を
持って来いっ〃
は？
ははっ〃
いいか
おまえたちも
一回ずつ
つくんだ！
あとて
王威の肉を
こねて
おまえたちに
分け与える
からな！
なにせ
老人は体も
固いからな
こやつを
よくついて
柔らかくしてやろう
ぶわっははは
古来の
言い伝え通り
だのう
頑固な年寄りは
頭が固いわ！

ひっ
ひいい〜〜っ
いいやだ
かんべんして
くれ〃
ひいい〜〜っ〃
おらおら
腰が引けてるぞ！
もちっと
気合い入れねえか〃
ガはは
はは!!
地獄じゃ
この世の
地獄じゃ

玄徳のことだけでも頭が痛いのにあの小わっぱはどうしてくれようか"
骸延様もはや合法的に狼刃を処分できぬなら密かに亡き者にするしか手はありませぬ
簡単に言うな手があるのか?
状況を利用します一つは南京楼の自立の動き
もう一つはこの報告をご参考になりましょう
ん?
ほほう竜我が妻をとな
なるほど

狼刃や
その配下の
武将も多数
その宴席に
呼ばれている
宴席に
多数の護衛を
連れていくわけにも
いかんだろう
しかも
自分の部下の
領地
さらに宴だけなわと
なれば
油断しています
斬った後で
南京楼自立の証を
太常府様に示せば
納得なされ
ましょう
狼刃と
竜我
二人まとめて
消し去れる！
この好機を
逃す手は
ない！
よし
精兵五百を選び
領民の姿で
南京楼に
送り込め〃
ははっ！
口実をもうけて
俺自身が
乗り込み
直接指揮を
取る！

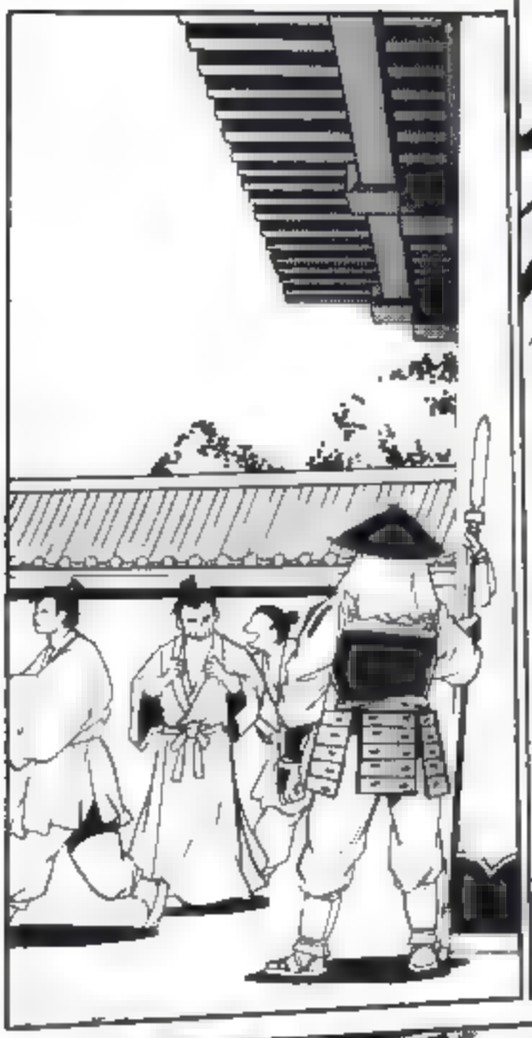

南京楼


なんても
太守様の奥方に
なるお方は
阿曽主禅公の
娘だそうな
阿曽家っていやあ
天子様の
娘婿の家だろ
皇族の娘さんって
ことか
そりゃ
たいした
もんだ

狼刃元帥も
いらっしゃる
そうだ
へえ
一部下の
婚儀にねー
まあ
それだけ
賞われてるって
ことだ
当日は
城の中庭で
無礼講の
宴席があるとよ
そりゃ
ぜひとも
お呼ばれに
なろう
いい酒が
飲めるぜ!

皆の者
よく聞け！
この度
太守様の
婚儀を祝い
恩赦の沙汰が
あった
よって
罪の軽い
おまえたちは
放免する
さあ
早く出ろ！
早く！
こらっ
おまえも
早く出んか
あっ
はいはい
よかった
よかった
へへっ
太守様々
だな

出ますよ
出ます



出ては
みたものの
行くとこ
ないし

はてさて
どーしようか

それにしても
腹減ったなあ

とっかで
ツケて
飯くわして
くれるとこ
ないかなぁ～～

そーいうとこが
あれば
僕だって
無銭飲食なんて
しなかったのになー

♪♫
♫
これと
これと
これも
買ったし
お金
あまっちゃった
から
何かお菓子でも
買っちゃおうっと
ん？
やだやだ
こ　れな
い…人気なの…
浮浪者に
会うなんて
道変えよう
かな

お
お嬢ちゃん
や――っ
放して――っ!!
バカ
バカ!!
こ
怖がらないで
何か食べ物
持ってないかい
持ってないわよ!!
放せ
バカ――!!
あ
へ〜〜。。
そうかあ
そんなに
おなか
すいてるの?
ああ
もう二日も
何も食べて
ないんだ
蘭々や
困った人を見たら
救いの手を差し延べ
ねばならんぞよ
はっ
道師様!!

ナニオォ!!!
ガッガッ
おいしい？
うんうん
どーして貧乏なの？
働きゃいいのに
いや何回も仕事についたけどさ
働きもしないで本ばかり読んでるってすぐクビになっちゃうんだ
ニガ!!
ヘー——本が好きなんだしゃあ頭いいんじゃない？
ゲプーン
さあ
読んでるだけだからね
人からほめられたためしもないし

ねえねえ
ほんとに
お城に行くの
かい？
うん
何か仕事
紹介して
あげるよ
いい年こいた
大人が
何もしないで
おなかすかして
なんて
見てて哀れ
なんだもん
スイマセン
ところで
あんた
名前は？
あ
えーと
林見嘉
字は子明てす
あたし
蘭々
よろしくね
困りますな
おチビちゃん
勝手にそんな男を
城内に連れ込んでは

わたしが
竜我様に
しかられます
そんなこと
言わないでき
三楽斎様
この人に何か
仕事あげてよ
やれやれ
しょうがないな
林 則嘉とか
言ったな
おまえさん
何ができるんだ
えーと
とりあえず
無芸大食
と近眼てすが
つまり
な――んの
取り柄もなしか
けど いっぱい
本読んでるん
だよ
本をね
じい～～っ
まあいい
下男として
使ってやろう
体力なさそう
だがな
よかったねー
これで
おなかすかせずに
すむよ!!
!!!
はは
ありがとう
蘭々ちゃん

うん！
とーした
軍師さんよ
昼間っから
酒漬りかよ
おう
項武か
てめえ
付き合え!!
何だか
やけ酒っぽいな
るせ——っ！
こいつは
祝杯だ
ケチつける
気か！
ちくしょう
紫紋ちゃんの
ことは
忘れようと
思ったのによ!!
未練だぞ！
大覚帥師真!!

そーいや
さっき
武王都から
骸延って野郎が
来てたぜ
何!?
今とこに
いる!
竜我様と
会ってるだろ
バカ野郎
それをもっと
早く言え!!
骸延の奴
何を…
おいおい
何そんなに
慌ててるんだよ
五丈騎都尉
南京楼太守
竜我雷を
本日付けで
鎮南将軍に
任命する

さあ
将の印綬を
受けて下され
ゆめゆめ
拒むことなかれ
俺を
将軍に？
おめでとう
ございます
太守！
さよう
竜我殿の
武勇・功績は
将軍位に
価すると
衆議一致
しましてな
聞くところによると
ご夫人をお迎えとか
それゆえ婚儀に
間に合うよう
駆けつけた
次第で
醫
おう
師真か
いいところに
来たな

骸延殿
紹介しよう
我が南京楼軍の
軍師
大覚屋師真だ
これは
お初に
お目にかかる
骸延でござる
うん？ おまえ
酒の匂いが
するぞ
昼間っから
やってたな
ああ
そーだよ
ははよいては
ござらんか
都からも
よい酒を
お持ちいたし
ましたぞ
あの日
酒に溺れては
いない
こいつはかなり
手強そうだな……
ったく
遠路はるばる
ご苦労なこった…
何しに来やがった！

ほう
婚儀は
三日後で
ござるか
それはそれは
待ち遠しいで
ござろう
はは
懿延殿にも
ぜひご出席
願えればと…
それはぜひとも
参りましょう
お招き感謝
いたしますぞ
どうぞ
こちらの部屋で
おくつろぎ
下さい
では
明日また
どうぞ
おかまいなく
ふふ

来ておるか!?
はっ
骸延様
ここに
兵は予定通り
潜り込んだか?
はっ
万事ぬかりなく
俺が盃を
落とした
時が
合図だ
機を逃すな!
はっ〃
人が
参りました
では
うむ
骸延!
〃

久し振りじゃのう達者か？
おおっこれは道師様！
こんな形でお会いできるとはご無沙汰いたして申し訳ございません！
これこれそんな堅苦しいあいさつは抜きじゃ
孫臏が
昇正のW編で
あったころ
孫臏は龐涓らと共に
鬼谷の元で
兵学を学ぶ
師弟の間柄であった
それでは道師様も竜我殿の婚儀に招かれて
うむ姫君とは面識があるでな
あの美しい姫君を手にした花婿という奴の品定めにな

ははは
相変わらず
ですな
美人には
目がないようで
まだまだ
若いもんには
負けんよ
ところで
骸延
は
この度の
おぬしら兄弟
による
五丈の乗っ取り
全て
おぬしの采配と
見たが……
あのような
やり方
いつかは先生の
お叱りを受けると
思って
おりました
ただ
言い訳に
なりますが
我ら一族にとって
あれしか
生き残る手段は
なかったのです

玄偉・鳳鳴ら
権謀術数に
長けた人間
相手には
道理に目を閉ざし
力をもって
向かうしか
ございません
てした
それが
あのような結果と
あいなりました
貢めている
のではない
兵は奇を好む
あれも一つの
道てあった
ははっ
ありがたき
お言葉
少しは
胸のつかえが
とれました
我々
軍師として
仕えたからには
主君に王道を
歩ませるのが
仕事だ
結果を
出せればこそ
その方法も
正当化される
モグ
モグ
おぬしも
兄に仕えたなら
兄骸羅を
天下人とせよ
わたしも
兄に自分を
懸けました
人並みはずれた
武勇に
懸けたのてす
忠を尽くし
智を尽くし
股肱の力を尽くして
必ずや兄を
天下人にして
ご覧に入れます

華玉も
そう思うて
おろう
いや先生
華玉は
いや
生きておれば
と思うて
口にしたことだ
気にするな
道帥様は
気付かんで
おるのか！
しかし
やっかいな
ことになった
このままでは
道帥様の身に
危険が
及んでしまう――
いや
まさか
俺の行動を
見抜いて
阻止するために
招きに応じた
のか！
どの道
決行するまでだ…
計画の変更は
できん！
どうだ
将軍って
呼ばれるのは？

別に 骸羅の五丈の将軍位なんて興味ねえよ
これじゃまるで奴の臣下だぜ冗談しゃねえ！
将軍お茶でございます
おおっ!!
おいっまたこりゃいい女はべらしてんじゃんか！
早くも第二夫人候補ってか
ばかやろーっ！違うって!!

あの娘は
南京楼の
紙問屋
伊砲屋の
娘でな
あなたは
必ず世に
名をなされるお方
娘をもらって
欲しいと
えらい
頼まれましょうでな
俺が
近々紫紋と
結婚するからって
言ったら
ならば奥女中で
結構だと
言ってよ
!!

忍び
危険の配下の
者ではない！
わっ
あっ
ごめんなさい
ん？
どうしたの？
わたしに
何かついてる？
ううん
別に
たださー
華玉姉様の
香りが
したような
気がしたの

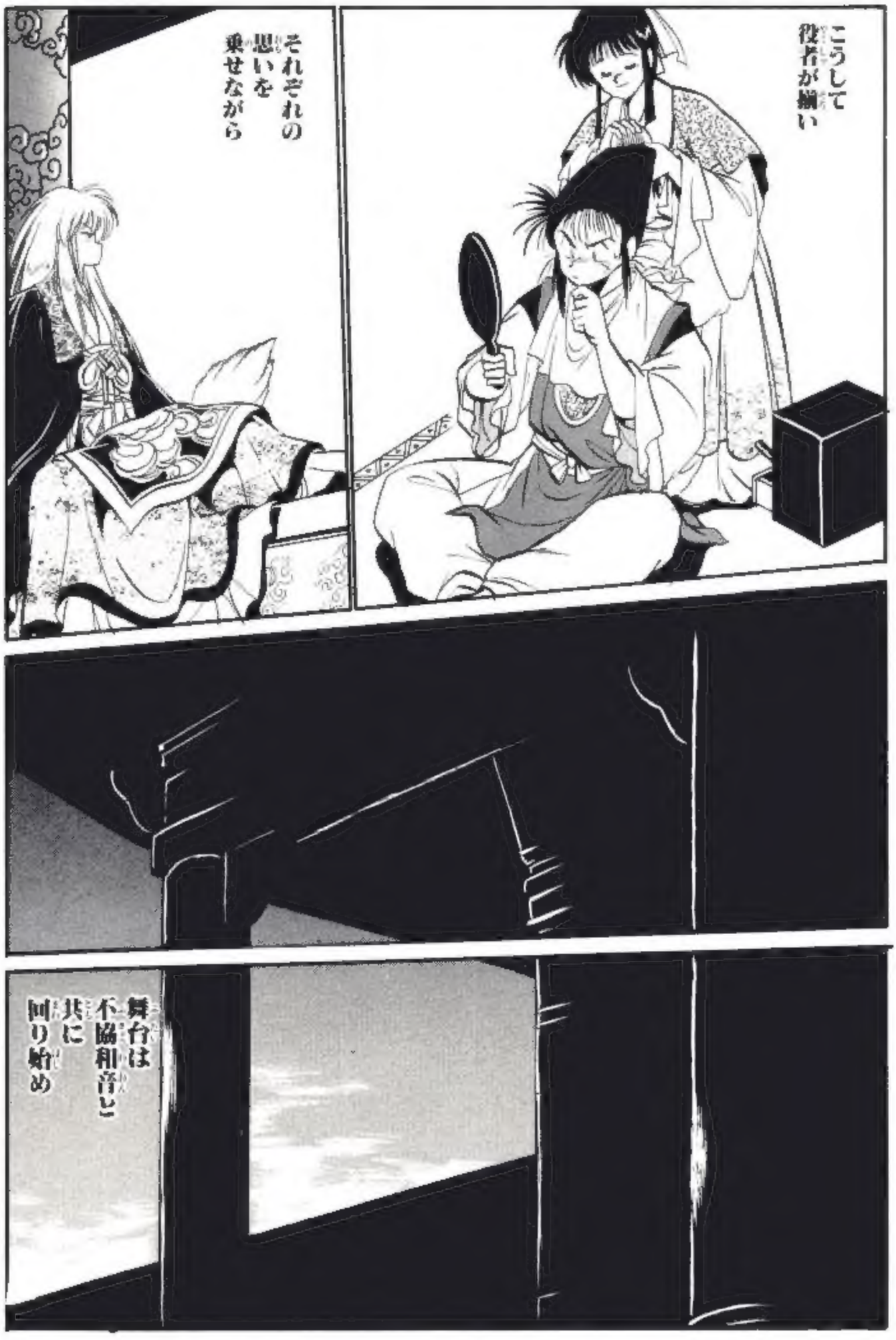
華玉姉様ってあの華玉様?
うんでも気のせいねおねーさん全然似てないもん
スタスタ
あのね あのね 紫紋様がねおいで下さいってすっごくきれいだよ!!
雷様――!
おうチビスケ
なんだよーやく婚礼衣装が届いたみたいだな

早く早く！
わかった
わかった
行くよ
てわけだ
悪いが
ちょっくら
留守にするぜ
ケッ
あ――
勝手に
のろけて
きやがれ
しかし気になるな
骸婬の奴
あいつがわざわざ
乗り込んで
来やがったんだ
何かたくらんで
いやがるな
南京後軍の増強を
中央が快く思ってはいないだろう
しかも
弐当日には
銀刃以下
軍首脳が多く
駆けつけるからな
もし奴が雷と銀刃
二人の排除を
考えているなら

おい
誰か！
お呼び
でしょうか
項武と
鐘士元を
呼べ！
つまらん
仕事だが
結婚初夜で
旦那なくしちゃ
紫紋ちゃんが
かわいそうだし
今後当分
敵対するだろう
項王戯延の出発を
くじいてやろう

♫♪
あ
ん！

見かけない顔だな 新顔か？
え？
え——と 今日からここで働かせてもらってます 林則嘉っていいます
そうか 俺が竜我だ まあしっかり頼むぜ！
はいはい どーもごていねいに！
へえ——あれが太守の竜我様かー
若いのにやっぱ威厳ってのがあるな！
けど一々使用人の顔まで覚えてるんだ
やっぱ人の上に立つ男ってのは少し違うな！


こうして
役者が揃い
それぞれの
思いを
乗せながら
舞台は
不協和音と
共に
回り始め

華烟の典を
迎えるここになる

*結婚式の異称

Dengeki Comics

銀河戦国群雄伝ライ ⑦

1993年4月30日　初版発行

著者　真鍋譲治

発行者　角川歴彦

発行所　株式会社メディアワークス　〒101　東京都千代田区神田神保町2-22-11　カンナビル　電話03-5276-2433(編集)

発売元　株式会社主婦の友社　〒101　東京都千代田区神田駿河台2-9　電話03-3294-1131(営業)

装幀　朝倉哲也+design CREST

印刷・製本　大日本印刷株式会社

©JOJI MANABE 1993

Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。禁・無断転載・複製

初出／月刊コミックコンプ92年6月号～92年10月号(角川書店刊)

ISBN4-07-300080-2 C0379

毎月書店で

オレが待ってるぜ!!!

毎月27日発売!!!

前代未聞のスーパー連載陣

メビウスクライン
麻宮騎亜

魔狼王烈風伝
沢田 翔

爆れつハンター
原作 あかほりさとる 作画 臣士れい

エンジェルアーム
衣谷 遊

ローンナイト2
吉富昭仁

トライアルかおる!
山本よしふみ

緋翔伝
～幾千の月のかけら～
夢来鳥ねむ

ダークマドンナ
原作 荒俣 宏 作画 柴田文明

東京ミカエル
原作 大塚英志 作画 堤 芳貞

他、豪華作家陣多数

銀河戦国群雄伝
ライ
真鍋譲治

月刊電撃コミック
GAO

発売 主婦の友社 発行 メディアワークス